

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画		令和5年度計画達成状況		内部質保証推進会議	
	評価区分		評価区分		評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	
4. 教育課程・学習成果								
<p>○医療保健学部看護学科 【計画10-1】 医療保健学部看護学科の新カリキュラムの運用と評価を実施する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 学年別目標の周知と評価の実施。 2. eポートフォリオの運用。 3. 新カリキュラムのモニタリング・新規科目の準備・改善・評価の実施。</p> <p>「評価指標」 ・学年別目標の自己評価実施学生数：90%以上 ・eポートフォリオの実施学生数：80% ・カリキュラム・教育に関する企画の実施：年2回以上 ・カリキュラム評価に関する会議の開催：年1回以上（令和5年度）</p>	Ⅲ	<p>1. 学年目標（旧：学年別目標）は5月に教授会で承認された。そのため令和4年度入学生への説明は、7月に行った。卒業時到達目標（3・4年生）・学年目標（1・2年生）の自己評価は、4年生は2月13日に実施し、96名が回答した（回答率92.3%）。1～3年生は3月28日に説明し、4月10日までの回答期間を設定した。3月29日現在、1年生88.2%、2年生85.6%、3年生87%と前年度の53.6～59.6%から大幅に上昇した。 2. WebClassの修学カルテを利用し、eポートフォリオを実装し、3月末の卒業時到達目標・学年別目標自己評価から運用を開始する。 3. 夏季および春季看護学科FD研修会で、当学科におけるポートフォリオの説明を行った。関連事項として、全教員に対し、各科目のDP重みづけワークを行い、担当科目の本学科カリキュラムにおける位置づけを確認する機会とした。2月各科目のDP重みづけがほぼ確定し、その結果を受けて、履修系統図を修正、2023年度以降のディプロマ・サブメントに適用を開始する。</p>	【年度計画10-1】 1. 学年別目標の周知と評価：4月履修ガイダンスで説明、2～3月学年別目標に沿った学生自己評価の実施。 2. 学修ポートフォリオの運用改善。 3. 新カリキュラムのモニタリング・新規科目の準備・改善。 4. 社会からの要請への対応した学士課程教育（今年度より追加）：大学での学び方支援プログラムの導入、ヘルスデータサイエンスプログラム（保健看護データコース）の普及、教学マネジメントの理解とカリキュラム・教育体制への導入準備。	Ⅳ	<p>1. 4月履修ガイダンスでDPと学年目標（旧：学年別目標）を説明した。次に、2～3月に改めて説明し、学年目標達成度の自己評価を実施した。実施率は、全学年目標だった80%を上回った（1年次88.7%、2年次88.1%、3年次83.7%、4年次87.5%）。 2. WebClassを用いた学修ポートフォリオの1・2年生実施率は、80%以上だった。運用について教員にも調査を行い、一部仕様を修正した。 3. カリキュラム・教育に関する企画は、2回実施した（9/29教学マネジメント企画を兼ねた、3/15カリキュラム企画）。また、カリキュラム評価に関する会議は、4回実施した（2/27、9/7、11/14、3/4）。 4. 大学での学び方支援プログラムは4月から5月まで計3回開催した。出席率は第1回88.7%、第2回93.1%、第3回69.6%と、60%以上で推移した。次にヘルスデータサイエンスプログラム（保健看護データコース）の修了者（2023年度）は20名だった。教学マネジメントの理解とカリキュラム・教育体制への導入準備として、7回会議を開催し（4/27、6/6、7/31、11/14、12/22、1/16、2/16）、学科教員に対してはFDを2回実施した（9/29、3/15）。</p>			

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>【計画10-2】 グローバル人材の育成のための取組みを推進する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 看護学科グローバル人材育成に向けた全体構想の検討・実装・評価・改善の実施。 2. 外国人模擬患者を対象としたシミュレーションプログラムの実施。 3. レニック先生の英語クリニックの継続実施と評価の実施。</p> <p>「評価指標」 ・外国人模擬患者を対象としたシミュレーションプログラム10名以上、アンケート回収率90%以上 ・レニック先生の英語クリニックの参加者数10名以上（年）、アンケート回収率90%以上 ・グロプロ会議回数10回/年 ・活動実績広報件数3件以上</p>	Ⅲ	<p>1. 看護学科が目指すグローバル人材とは/必要とされる資質/関連する科目について検討した。学科教員の意見聴取を経て資料を作成した。学生向けの紹介動画も作成し、当初ガイダンスにおける説明準備をすすめた。 2. 令和5年3月3日、6日、7日に実施、参加学生数15名（1～4年次）だった（アンケート回収率50%）。 3. レニック・ニコラス先生がNTT東日本関東病院から移籍されたことにより、レニック先生の時間の確保、謝礼の支払いなどが必要となったことから今後の活動継続については検討している。</p> <p>【その他の活動実績】 ・グロプロ会議 11回/年。 ・活動実績広報件数4件（内訳：リレー講演各回計3回、学科報告会1回）。 ・育成したい人材像を踏まえた「国際看護論（選択）」科目構成（担当者含む）を検討し、次年度開講準備。 ・リレー講演「世界の医療ケアを知ってみよう」の開催（第1回12月22日レニック・ニコラス先生、第2回1月12日MICHIKO先生、第3回2月10日佐々江龍一郎先生）。申し込み者総数数（オンデマンド視聴者含む）1回目202名、2回目202名、3回目227名（リアルタイムオンライン参加者第1回86名/第2回61名、第3回73名）。</p>	<p>【年度計10-2】 1. 看護学科グローバル人材育成に向けた全体構想の実装。 2. 外国人模擬患者を対象としたシミュレーションプログラムの実施。 3. レニック・ニコラス氏の職場異動に伴い停止中。再開の可能性を検討する。</p> <p>「評価指標」 ・外国人模擬患者を対象としたシミュレーションプログラム10名以上、アンケート回収率90%以上 ・レニック先生の英語クリニックの参加者数10名以上（年）、アンケート回収率 90%以上 ・グロプロ会議回数10回/年 ・活動実績広報件数3件以上 *レニック先生の英語クリニックは実施する場合のみ評価を行う。</p>	Ⅲ	<p>1. 学生の関心を高めるための戦略と成果（推進担当：中山、山崎） ・ガイダンスの充実（各学年年度当初ガイダンス、動画作成、医愛祭での紹介、ウェブクラス活用、国際交流委員会と連携した情報提供等、メンバーにより授業後等を活用した広報活動）など、学生に情報が行き届くようこまやかに広報活動を行った。今年度は、昨年度に対して国際看護論受講生（4名→23名、外国人模擬患者演習参加者（12名→16名）と増加した。 2. 令和6年3月7、8日実施。参加学生数16名（内訳 1年生7名、2年生1名、3年生8名）外国人模擬患者6名（ベトナム、ミャンマー、台湾、シンガポール、モンゴル）、アンケート回収率63%。（推進担当：大堀） プログラム終了時にアンケート依頼を依頼したことにより回収率は上昇した。今後のプログラム改善に役立てたい。 3. レニックニコラス先生の異動により停止中。看護学科連携施設のNTT病院における英語学習会参加機会など、別の方法での英語学習機会について情報収集を行った。連携病院と連携可能な様々な教育機会を発掘し、臨床とのコラボレーションを図ることを検討していく。</p> <p>【その他の活動実績】 ●グロプロ会議開催 10回（令和5年度） ●看護学科新規プログラムの立ち上げ 令和6年度からの看護学科独自プログラム「グローバル看護人材育成プログラム—調和のとれた社会に向けて—」英語標記：Globally Competent Nursing Program(GCNP):Embracing Dibersit for a Harmonious Society-」の設置準備（要項の作成、学生向け履修案内の作成、関連科目に周知）。 補足：GCNPは、看護学科独自プログラムとして、関連科目と活動をポイント評価し、学科長による認証を行うもの。 ●グロプロ業績の発信 ・2021年外国人患者模擬演習参加者を対象にインタビューして得た学びのデータを、紀要に投稿・採択決定（筆頭 山崎） ・第43回日本看護科学学会において交流集会の実施（国際看護論設置と、グローバル人材の育成に関する交流セッションの企画運営（筆頭 松尾）</p>				

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画10-3】 学生サポートによるへこたれない心の育成を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」</p> <p>1. 新入生ガイダンスにて、学生生活ガイダンス及びアドバイザー活動を実施する。</p> <p>2. 新入生ガイダンス実施後に、Formsを用いたアンケートを実施し、アドバイザー制度・アドバイザー教員の連絡先・学生相談室・障がい学生支援制度の認知度、及びアドバイザー活動の満足度を評価する。</p> <p>3. この評価をもとに、次年度のガイダンスに向けて成果と改善点を明らかにする。</p> <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生ガイダンス実施後アンケートの実施状況 ・アドバイザー制度、アドバイザー教員の連絡先の認知度100% ・学生相談室の認知度100% ・障がい学生支援制度の認知度100% ・新入生ガイダンス時のアドバイザー活動の満足度（満足している人）80% 	Ⅲ	<p>1.2. 看護学科学学生委員会では、学生自身の援助希求育成に寄与するために、新入生ガイダンスにて、学生生活ガイダンスおよびアドバイザー活動を実施している。その満足度を評価し、次年度のガイダンスに向けて成果と改善点を明らかにするため、令和4年度の5月～6月に任意のwebアンケートを実施した（回答率約82%）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問項目の構成は「大学全体の各種相談窓口について」「看護学科のアドバイザー制度について」「“キャンパスライフフレット”について」「学生生活サポート制度に対する受け止めについて」「4月5日に実施した新入生への“学生生活ガイダンス”について」である。 ・結果として、全体の理解度の平均は79%で、満足度はとても満足、まあ満足を含めて約83%（n=95）と高い満足度であった。自由記述では「相談ができる場所があると知って気持ちが楽になりました、サポートが手厚くてありがたいと感じた、高校生の時とは違い、自分から積極的に行動していく必要があると思いました」など前向きなコメントがみられた。 ・次年度のガイダンスは、現時点では従来通りの実施で問題はないと判断し計画することとした。 	<p>【年度計画10-3】</p> <p>1. 新入生ガイダンスにて、学生生活ガイダンス及びアドバイザー活動を実施する。</p> <p>2. 新入生ガイダンス実施後に、Formsを用いたアンケートを実施し、アドバイザー制度・アドバイザー教員の連絡先・学生相談室・障がい学生支援制度の認知度、及びアドバイザー活動の満足度を評価する。</p> <p>3. この評価をもとに、次年度のガイダンスに向けて成果と改善点を明らかにする。</p> <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生ガイダンス実施後アンケートの実施状況 ・アドバイザー制度、アドバイザー教員の連絡先の認知度100% ・学生相談室の認知度100% ・障がい学生支援制度の認知度100% ・新入生ガイダンス時のアドバイザー活動の満足度（満足している人）80% 	Ⅲ	<p>1.2. 看護学科学学生委員会では、学生自身の援助希求育成に寄与するために、新入生ガイダンスにて、学生生活ガイダンスおよびアドバイザー活動を実施している。昨年度アンケートでは従来通りの高い満足感が確認されたものの、依然感染に伴う人との交流機会の減少がある中で、上位学年からの効果的な情報提供や交流機会が少ないと想定された。そこで、先輩学生がガイダンスに参加する計画を立案した。具体的には、学生生活経験を新入生に伝えたり、質問に答えるなど、具体的な体験を知る機会設けた、である。令和5年度では、これらを踏まえたガイダンスの満足度を評価し、次年度のガイダンスに向けて成果と改善点を明らかにするため、令和5年度の6月～7月に任意のwebアンケートを実施した（回答率約77%）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生ガイダンスでは、新入生が空き時間に先輩に交流を図る場面を見受けることができた。 ・質問項目の構成は「大学全体の各種相談窓口について」「看護学科のアドバイザー制度について」「“キャンパスライフフレット”について」「学生生活サポート制度に対する受け止めについて」「4月5日に実施した新入生への“学生生活ガイダンス”について（先輩との交流について）」である。 ・新入生ガイダンス実施後アンケートの結果、全体の理解度は85%で、ガイダンス全体の満足度はとても満足、まあ満足を含めて95%（n=86）で、昨年度より高い満足度となった。一方で、大学の支援制度について、「障がい学生支援制度があることが分かった」（69%）や「障がい学生支援制度の窓口が分かった」（42%）と学生の理解度が低いものもあった。自由記載では先輩との交流に関する内容が多く、「より多くの先輩方からご意見を聞きたいと感じました」など前向きなコメントが見られた。次いで、大学の授業や勉強について、「テスト勉強の仕方」、「勉強相談ができればいいと思います」など要望も多くみられた。 3. 次年度ガイダンスでは、アンケート結果や自由記載より見えてきた課題から、より効果的なガイダンスの方法を検討し、計画することとした。 		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画		令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分		評価区分		評価区分			
<p>【計画10-4】 臨地実習指導者講習会を実施する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 臨地実習指導者講習会を、看護学科実習委員会の担当メンバーを中心として実施する。 2. 研修会プログラムは令和元年度の内容を踏襲し、9月に2日間の基本知識の講義・演習を実施することとし、講師は学内教員から募集する。 3. 対象者の看護師に10月～12月の実習指導のリフレクションシート記載を課し、1月に各参加者の実習指導体験のリフレクション演習を行う。 4. 令和3年度から5年間実施し、評価、その後の継続について委員会内で検討する。</p> <p>「評価指標」 ・実習病院・施設の参加者 看護師30名、教員15名</p>	Ⅲ	<p>1. 看護学科実習委員会の担当者3名を中心に企画・運営・評価を実施できた。 2. 9月に2日間の基本知識の講義・演習については、学内教員5名の協力を得て実施できた。 3. 10月から12月に本学の実習を担当していただき、実践を踏まえて実習指導者として各自2事例を提出し、1月にグループリフレクションを実施することができた。 4. 感染対策により、リモート研修としたことで、訪問看護ステーションや老健・特養施設の指導者は参加しやすい環境があった。一方、全体の参加人数が予定より少なく留まったことに関しては、本学のプログラム以外の外部研修を利用した方や感染状況の中で指導者役割の方の勤務調整などが影響したと推測できた。予定人数には満たなかったものの、研修アンケートでは、理解できた、役立ったという回答であり、他の人にも勧めたいということで参加者の満足度は高かったため、次年度は評価指標を人数ではなく研修評価内容も加味し、同内容で引き続き開催をする予定とした。</p> <p>「評価指標」 ・病院・クリニック：5施設 7名 ・特養・老健：2施設 2名 ・学内教員1名（講師や運営を除く）計10名</p>	<p>【年度計画10-4】 1. 臨地実習指導者講習会を、看護学科実習委員会の担当メンバーを中心として実施する。 2. 研修会プログラムは令和元年度の内容を踏襲し、9月に2日間の基本知識の講義・演習を実施することとし、講師は学内教員から募集する。 3. 対象者の看護師に10月～12月の実習指導のリフレクションシート記載を課し、1月に各参加者の実習指導体験のリフレクション演習を行う。 4. 令和3年度から5年間実施し、評価、その後の継続について委員会内で検討する。</p> <p>「評価指標」 ・研修後アンケート評価 ・実習病院・施設の参加者人数</p>	Ⅲ	<p>1. 看護学科実習委員会の担当者3名を中心に企画・運営・評価を実施できた。 2. 9月に2日間の基本知識の講義・演習については、学内教員5名の協力を得て実施できた。特に前年度からニーズの高かった参加者同士のディスカッションの時間を多くとった。 3. 10月から12月に本学の実習を担当していただき、実践を踏まえて実習指導者として各自2事例を提出し、1月にグループリフレクションを実施することができた。 4. リモート研修としたことで、訪問看護ステーションや老健・特養施設の指導者は参加しやすい環境があった。一方で勤務をしながら研修参加をしている状況もあり、ワーク時の入室遅れの参加者も多数いた。しかし、各グループにファシリテーター（教員）を配置することで、入室遅れの参加者へのサポートを行うことができた。授業期間中のため、学内教員の参加人数には限界があった。</p> <p>「評価指標達成状況」 ①研修後アンケート評価 講義内容について、理解できた、役立ったという回答が主であり、他の人にも勧めたいということで満足度は高かった。 ②実習病院・施設の参加者人数 ・参加者20名（病院：6施設 16名、特養・老健・訪看：3施設 4名） ・学内教員9名 計29名</p>			
<p>【計画10-5】 医療保健学部看護学科卒業生を対象としたホームカミングデイを実施する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 医療保健学部看護学科卒業生を対象としたホームカミングデイを実施することとし、卒業生によるパネルディスカッション及び運営を教員（看護学科就職対策委員会）と協働して行う。 2. パネルディスカッションのテーマは目的に合わせて年度毎に検討する。</p> <p>「評価指標」 ・ホームカミングデイの参加状況卒業生30名、教員20名、在校生10名</p>	Ⅲ	<p>1. ホームカミングデイを令和5年1月13日に開催し、卒業生5名、在学生等5名、教職員27名が参加した。 2. 今年度は令和5年4月より本学大学院にプライマリケア看護学領域が開設されること併せ「高度な看護実践能力」をテーマに企画した。また本学の卒業生支援に関する訴求力向上を目的として今年度はマギーズ東京の秋山正子氏を講師に迎え講演会と交流会を実施した。開催に係る費用は看護学科特別研究費を申請し運営に充てた。参加した卒業生からは「著名な講師の講演がありがたかった」、「看護職が何ができるか考える機会になった」などの感想もあり卒業生のキャリアを考える一助となっていると考えられるが、卒業生の参加が少ないため周知方法等開催方法等について今後も評価検討を行っていききたい。</p>	<p>【年度計画10-5】 1. 医療保健学部看護学科卒業生を対象としたホームカミングデイを実施することとし、卒業生によるパネルディスカッション及び運営を教員（看護学科就職対策委員会）と協働して行う。 2. パネルディスカッションのテーマは目的に合わせて年度毎に検討する。</p> <p>「評価指標」 ・ホームカミングデイの参加状況卒業生30名、教員20名、在校生10名</p>	Ⅲ	<p>1. 令和6年1月12日に、対面とリアルタイム配信のハイブリッド形式で開催した。就職対策委員を加えた参加者は、69名。卒業生26名、在学生8名、教職員33名、元教職員2名であった。 2. 今年度は、新人看護師の離職率が10%を超えたことを受け「看護実践家としての壁を乗り越えよう！」をテーマに、第一部を卒業生スピーカーによるトークセッション、第二部を参加者の交流会として実施した。スピーカーは、①小児専門病院で働く3年目看護師、②3次救急病院の集中治療センターで働く7年目の看護師、③病院勤務、海外青年協力隊等を経て23区区役所で勤務する保健師の3名とした。スピーカーの発表後には、卒業生を中心に活発な意見交換も行われた。終了後のアンケートは、回答数：50名（回収率80.6%）。全体の満足度では、満足とまあ満足が98.0%であった。交流会では、予定時間を超過して教員や同級生と会話をする卒業生の姿がみられ、HCDを開催する意義は達成されたと考えられる。また、在校生らも積極的にスピーカーに質問したりオンラインで交流したりすることができた。今回の3人のスピーカーの選定は妥当であったと評価している。次年度は、医療祭が五反田キャンパス開催になることを受けその期間中に開催することを検討している。さらに参加者増を目指し、今年度卒業生全員にHCD実施案内の送信を実施。今後も会の活性化を目指して、企画検討を重ねていきたい。</p>			

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議	
	評価区分			評価区分	評価区分			
<p>○医療保健学部医療栄養学科 【計画11-1】㊦</p> <p>専門性の高い心温かい医療人の育成の観点から、ボランティア活動を推進する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 主に「せたがやハウス」を利用し、国立成育医療研究センター病院にて付き添い入院している家族へ焼き菓子等の提供や食育媒体の提供を行う。 「評価指標」 ・主に「せたがやハウス」を利用し、国立成育医療研究センター病院にて付き添い入院している家族へ焼き菓子等の提供を実施：3回/年 ※COVID-19感染拡大状況により、「せたがやハウス」での食事支援活動が可能になれば、食事提供を実施：1～2回/年 ・主に「せたがやハウス」を利用し、国立成育医療研究センター病院にて付き添い入院している家族へ食育媒体の提供：3回/年 ・ボランティア学生：4名程度×3回＝12名</p> <p>【計画11-2】㊦</p> <p>幅広い分野で活動している管理栄養士として、必要な知識及びスキルを日々更新していくことが重要であることから、「卒後教育」として知識・スキルアップのための研修会を開催する。</p> <p>「計画達成のための方策」 本学教員及び卒業生が講師となり、各分野での事例・症例紹介や情報共有など、講義、演習、ワークショップを含む様々な学習形態で開催する。 「評価指標」 研修会の実施回数：年3回以上かつ年間の参加者数を卒業生・一般で100名以上</p>	IV	<p>1. 4回の実施を計画し、ボランティア学生を募り、延べ7名がボランティア活動を行った。</p> <p>2. 焼き菓子および食育カードを作成し、計3回の提供を実施した。</p> <p>・上記の通り、ほぼ予定通りの進捗であったが、本活動は社会貢献の側面が強く、医療栄養学科では本計画以外にも同様の社会貢献活動を複数実施している。そこで、次年度から、第9章に新たな計画として「地域への社会貢献活動の推進」を設定し、本活動もその中で進めていく。</p> <p>・一方、医療栄養学科では、過去から教育の改善活動を継続的に進めている。そこで、次年度の計画に「教育の質の向上」、「リメディアル教育の改善」を追加し、それらの活動を見える化する。</p>	IV	<p>【年度計画11-1】</p> <p>「評価指標」</p>	IV	<p>・令和5年度は3回開催し、延べ95名が参加した 第1回「ケア環境研究所の夏野菜を活用した料理教室」令和5年8月19日 参加者32名 第2回「臨床現場の研究報告会」令和5年9月30日 参加者22名 第3回「旭松食品共催こうや豆腐を活用した料理教室」令和5年3月9日 参加者41名 ・今年度は昨年度のWEBアンケート結果をもとに企画した。臨床現場での研究報告会では、研究に興味があるが実施できていない卒業生を中心に参加があり、実施後アンケートでは、満足度100%、次回の参加希望100%であった。 ・今年度は卒業生だけでなくその家族や職場の同僚等も参加可能としたが、今後も引き続き卒業生以外の参加も受け付ける。 ・今後希望する内容として、「食育分野の報告会」「異業種交流会（病院、会社、学校等）」などが多かったため計画に組み込んでいく。 ・今年度は1名の学科内教員、3名の卒業生・修了生、1名の管理栄養士に講師依頼したが、次年度は学科内教員への依頼を増やしていく。</p>		
	I	<p>・東京医療保健大学医療栄養学科令和4年度年度卒後教育を対面にて開催し、16名の卒業生が参加した（令和5年3月18日）。 ・今年度は今後の実施方法の見直しを図るための調査に重点を置いたため、年度計画を達成できていない。 ・卒業生のニーズ把握を目的に、9月に卒後教育に関するWEBアンケートを医療栄養学科卒業生に実施し、148名から回答を得た。その結果、医療分野に限らず幅広い分野の情報提供を求めていること、卒業生同士の情報交換の場が必要であることが明らかとなった。 ・そこで、次年度以降は病院の管理栄養士だけを対象とするのではなく、対象を広げて「卒後教育の拡充」を計画として掲げ、講義内容および運営方法を改善する。</p>	IV	<p>【年度計画11-2】</p> <p>医療を含めた複数の分野に関する研修会を、講義、演習、ワークショップなど様々な学習形態で実施し、卒業生に向けて参加を募集する。また、企業の協力を卒業生に講師の依頼をする。 「評価指標」 研修会の実施回数：年3回以上かつ年間の参加者数を卒業生・一般で100名以上</p>				

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分	評価区分		
<p>【計画11-3】 ⑦</p> <p>卒業時に管理栄養士国家試験合格が叶わなかった卒業生に対し卒業後に管理栄養士免許を取得できるように支援する。</p> <p>「計画達成のための方策」</p> <p>1. 卒業生向け管理栄養士国家試験対策講座を在校生の特別講義と同時開催する。</p> <p>2. 卒業後にガイドラインの改訂などがあつた場合は、卒業生対象に講座を開講する。この場合、日常業務と並行しての講座は日程調整で困難があるため、講座は動画配信で開講する。</p> <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> 参加者の合格率50%以上 	IV	<p>1. 卒業生向けの対策講座を開催したが、参加者はいなかった。</p> <p>2. ガイドライン改訂などの情報提供を希望した卒業生にメールで情報提供を継続した。また、一部の科目について対策講座の動画配信を始め、卒業生に動画配信の案内メールを配信したが、視聴希望者はほぼいなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 上記の通り、講座の希望者がほぼいなかったため、本計画は一旦中断する。一方、次年度から対象を広げる予定の計画11-2「卒業教育の拡充」の中で、本活動も含め卒業生に対し何に注力すべきかについて、再検討する。 	【年度計画11-3】				
			<p>【計画11-4】 ⑦</p> <p>既卒であっても本学で栄養教諭一種免許を取得可能とし、学校栄養職員から栄養教諭への任用替えを目指す卒業生への支援策を検討する。</p> <p>「計画達成のための方策」</p> <p>本学栄養教諭委員が担当し、科目等履修にて栄養教諭一種に必要な科目（栄養教育実習を含む）を修得できる時間割・組織を構築することが将来的に可能か調査を行う。</p> <p>1. 他大学の取組状況から本学で教職科目履修可能な状況を見出し、今後の生涯学習支援がどこまで実施可能か調査研究する。</p> <p>2. 時間割作成について、重点として取り組む。</p> <p>3. 本校勤務者並びに非常勤講師招聘が可能か調査研究する。</p> <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> 調査研究の実施状況等 	III	<ul style="list-style-type: none"> 本大学における科目等履修に対する規定に従い、医療栄養学科において、卒業生の教職科目履修の支援がどこまで実施可能か調査した。組織については、学科内の教職課程委員会が対応するだけでなく、全学的な組織である教職課程委員会が対応することも必須であると判明した。また、時間割内の受講は可能であると判明した。 一方、本学卒業生の希望者がほぼいなかったことから、本計画を単独で進めることは一旦中断することにした。その上で、今後は、次年度から対象を広げる予定の計画11-2「卒業教育の拡充」の中で、本計画も含め、何に注力すべきか、改めて検討していく。 	【年度計画11-4】	
				「評価指標」			

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画		令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会		内部質保証推進会議	
	評価区分		評価区分		評価区分		評価区分		評価区分	
<p>【計画11-5】 ⑦</p> <p>古代食の再現研究について、独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所・国立歴史民俗博物館との共同研究を引き続き実施し、研究成果を学術雑誌やシンポジウムの開催を通じ、成果発表を行う。</p> <p>「計画達成のための方策」 独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所・国立歴史民俗博物館との共同研究(令和5年度)と科学研究費助成金基盤研究A「東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」(令和6年度まで)の研究を通して、古代食研究の成果を今後学術雑誌やシンポジウムなどで報告する。</p> <p>「評価指標」 ・共同研究等の取組状況と成果報告</p> <p>【計画11-6】 (令和5年度より新規) 学生の主体的な学びを推進するため、学修者の支援体制を構築するとともに教員の教育力を高度化して教育の質の向上を行う。</p> <p>「計画達成のための方策」 ・学修ポートフォリオを用いることで、卒業時に目指すべき能力等をどこまで習熟したか、学生自身に振り返りと自己評価を促す。 ・管理栄養士国家試験合格に向け、自身の能力を客観的に分析し計画的に学修できるよう、ガイダンス・学修環境整備・学修指導を行う。 ・教員にアクティブ・ラーニング等の能動的授業の実施を促す。 ・教育内容の充実や教授方法の高度化のため、教員にFD研修会への参加を促す。</p>	III	<p>・新型コロナウイルスの感染拡大の影響から海外調査は出来なかったが、国内調査に変更して古代の食品の再現実験を行った。国立歴史民俗博物館に加え新たに独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所とも共同研究を行い、西大寺食堂院跡出土の遺物について土器の化学分析も加えて共同研究を行った。それに関して令和5年3月に「西大寺食堂院シンポジウム」を開催して、全国に成果報告を公表した。 令和5年3月に吉川弘文館からその成果報告書として、『古代寺院の食事を再現する』を刊行した。</p>	III	<p>【年度計画11-5】 科費基盤Aの国内での古代食研究国内調査の実施。 ①奈良を中心として発酵食品の研究 ②静岡県沼津市・西伊豆町を中心とする遺跡・遺物の調査と古代堅魚製品の再現</p> <p>「評価指標」 ・共同研究等の取組状況と成果報告</p> <p>【年度計画11-6】 ・各セメスターの終了時に、学修ポートフォリオを用いた振り返りと自己評価を学生に指導する。 ・能動的・計画的に国家試験対策を実行できるよう、自習室の確保、ガイダンスや模擬試験の実施、ICT利活用による個別最適化された教材や対策講座の提供などを行う。 ・教員にアクティブ・ラーニング等の能動的授業の実施を促す。 ・教育内容や教授方法の高度化のため、教員にFD研修会への参加を促す。</p>	IV	<p>・奈良文化財研究所と本学で再現実験を行い、試料についても調理学・食品衛生学・栄養学などの分析を行い、成果を出した。またその成果についてシンポジウムを行い、『カツオの古代学』として公刊する予定である。 ①今年度の研究計画であった発酵食品の再現実験であるが、奈良県御所市の油長酒造の協力の下、古代米と復元須恵器を用いた古代酒の再現実験を行い、『長屋王の酒を醸す』(庄田慎矢編吉川弘文館2024年刊行予定)に「古代史料に見える甕酒づくり」として発表する予定。 ②静岡県西伊豆町において地元の企業と協力して、古代の堅魚製品の再現実験を行った。この成果は『カツオの古代学』(三舟隆之・馬場基編吉川弘文館2024年刊行予定)で発表する。</p> <p>・新年度ガイダンスで学生に学修ポートフォリオについて説明を行った。また、教員へは教授会で、学生に学修ポートフォリオの作成と提出を促し、学修ポートフォリオをもとに指導することを依頼した。学生にはWebClassで提示されるディプロマサプリメントからfGPA値を読み取り学修ポートフォリオに記入させたのち、自己分析と次期セメスターの目標を記載させ、WebClassで提出させた。アドバイザーは提出された学修ポートフォリオを学生指導で利用した。学修ポートフォリオにより学修の振り返りと自己評価を行った学生の割合は、89.1%であった。(1年生：90.3%、2年生：83.5%、3年生：94.7%)</p>				

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学修ポートフォリオにより学修の振り返りと自己評価を行った学生の割合 95% (令和8年度) ・管理栄養士国家試験合格率 全国平均以上 ・アクティブ・ラーニングを取り入れている講義・演習の割合 55% (令和8年度) ・FD研修会に参加した教員の割合 96% (令和8年度)、授業評価アンケート学科平均値が前年比で2%増 <p>【計画11-7】 (令和5年度より新規)</p> <p>専門性を高めるための基盤となる基礎学力を向上させるため、リメディアル教育を充実させ、その教育を継続する。</p> <p>「計画達成のための方策」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生の学力把握とその結果に基づくリメディアル教育の実施 ・リメディアル教育の継続的な改善 <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リメディアル関連科目受講推奨者の履修率100% ・令和5年度リメディアル国語開設 ・リメディアル教育の改善実施 			<p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学修ポートフォリオにより学修の振り返りと自己評価を行った学生の割合 80% ・管理栄養士国家試験合格率 全国平均以上 ・アクティブ・ラーニングを取り入れている講義・演習の割合 45% ・FD研修会に参加した教員の割合 90%、授業評価アンケート 学科平均値が前年比で2%増 <p>【年度計画11-7】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生の学力把握とその結果に基づくリメディアル教育の実施 ・リメディアル国語開設に向けた準備と教育実施 <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リメディアル関連科目受講推奨者の履修率100% ・リメディアル国語開設 	Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> ・自主的及び計画的に国家試験対策ができるよう、国家試験対策委員や外部講師によるガイダンスを実施した。試験問題への挑戦、教員による授業、外部講師を招いての対策講座を、1回2時間を目的に、45回実施した。模擬試験は5回実施した。また、WebClassで国家試験の過去問を、オンラインで受講できる駿台グループの管理栄養士教育支援システムを提供した。また、事務部と協力して学生が自習できる教室やスペースを確保した。第38回管理栄養士国家試験の合格率は、本学：64.6%、全国：80.4% (前年 本学：60.6%、全国：87.2%) であった。 ・外部講師を招き、「医療系カリキュラムにおける知識教授を目的としたアクティブ・ラーニング」のFD研修会を実施した。アクティブ・ラーニングを取り入れている講義・演習の割合は、60.4%であった。 ・教授会及び電子メールで、学科内教員及び全学教員へFD研修会への参加を呼び掛けた。FD研修会に参加した教員の割合は、75.0%であった。授業評価アンケートでは、学科平均値が前年比で8.7%減少した。ICTの利活用やアクティブラーニングの取り入れなど、学修の充実に関する情報提供を継続し、授業評価アンケート結果の改善を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ・入学時の化学・数学・英語テストの平均点は前年度新入生とほぼ同等であり、入学区分別では、例年通り総合選抜・推薦の方が一般・共通テストよりも低い傾向。一方、今年度開始の国語のテストに入学区分別の差はなかったが、大学生としては不十分な得点。 ・テストの低得点者に対し、オリエンテーション時、授業後の対面、メールを利用し、リメディアル関連科目の受講を推奨。結果として、低得点者の受講率は、基礎数学84%、化学Ⅰ100%、リメディアル国語32%。リメディアル国語は今年度から開始した科目であるが、単位認定のない科目であることが低受講率の原因と推測。 ・リメディアル国語受講者のアンケートによる満足度は高く、科目として必要と考えられたため、次年度から選択科目として「実用国語」を開設することに決め、開設の準備を実施。 				

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議	
	評価区分			評価区分	評価区分			
<p>○医療保健学部医療情報学科 【計画12-1】 ㊦ Society5.0に基づくヘルスケア情報人材像を確立し、高等学校、実習先、就職先・進学先など社会におけるステークホルダーからの信頼を勝ち取る。</p> <p>「計画達成のための方策」 Society5.0におけるヘルスケア人材像やその背景の書籍化及びカリキュラムの見直し・実装等を推進する。</p> <p>「評価指標」 ・入学定員に占める学生の割合100% ・実習先の実習系科目における肯定的な指導者評価75%超 ・就職先における肯定的な上司評価75%超</p> <p>【計画12-2】 ㊦ 卒業生への生涯学習支援として、卒業後の資格試験取得に向けた学習サポートを実施する。</p> <p>「計画達成のための方策」 卒業生向けの医療情報技師等の資格試験講座を開講する。</p> <p>「評価指標」 ・卒業後3年以内の推奨資格（医療情報技師等）取得者15名以上</p> <p>【計画12-3】 ㊦ 紀要・学会誌への投稿を推進する。</p> <p>「計画達成のための方策」 紀要・学会誌への投稿がスムーズにできるための問題点を抽出し、今後のアクションとスケジュールを決定する。</p> <p>「評価指標」 ・学科全体として、英語論文を3本/年以上公表</p>	III	<p>1. 学科教員および有識者に執筆を依頼し、原稿の収集は9割程度終了した。校正作業を進めており、令和5年度前期中に出版予定である。</p> <p>2. カリキュラムの見直しを行い、学生の多様性に対応できるように選択科目を多く配置する。令和5年度年度入学生より、新カリキュラムを実施する。</p> <p>・令和5年度の入学定員に占める学生の割合は60%で、目標不達となった。学生募集部主体から、学科教員、世田谷事務部が一体となって、募集活動に取り組む体制に再構築を行っている。</p> <p>・病院実習における肯定的な指導者評価は100%であり、今後もこれを継続したい。</p> <p>就職先における上司評価は、新型コロナウイルス感染症による面会制限もあり、令和4年度は調査が行えていない。令和5年度中に実施できるよう検討したい。</p>	III	<p>【年度計画12-1】 1. アドミッションポリシーの見直し・実装。</p> <p>「評価指標」 ・入学定員に占める学生の割合100% ・実習先の実習系科目における肯定的な指導者評価75%超 ・就職先における肯定的な上司評価75%超</p> <p>【年度計画12-2】 前年度計画記載以外の卒業生にも資格取得ニーズがないか把握する。</p> <p>「評価指標」 ・卒業後3年以内の推奨資格（医療情報技師等）取得者15名以上</p> <p>【年度計画12-3】 英語論文を2本以上投稿する。</p> <p>「評価指標」 ・英語論文の投稿状況</p>	III	<p>・2023年度入学者から新カリキュラムを適用し、その新DP/CPに基づくアドミッションポリシーの適用を行っている。</p> <p>・入学定員に占める学生の割合は60%を下回っており、入試広報部、世田谷事務部とも連携して抜本的な対策が急務である。</p> <p>・新カリキュラムに基づく人材像を取りまとめた書籍を刊行したため、これを配布するとともに実習先や就職先からの評価を定性的に調査しはじめている。現時点では肯定的な評価が多いので、その調査結果を2024年度に取りまとめたい。</p>		
	II	<p>・卒業生の就職先企業における資格取得講座を継続し、12名の若手社員（本学以外の卒業生も含む）は受験し、6名が合格または科目合格した。新型コロナウイルス感染症の影響もあり対象拡大できていないが、より多くの卒業生に還元できるよう方法等の見直しを行っていききたい。</p>	II	<p>・卒業生の就職先企業における資格取得講座を継続し、3名が合格した。新型コロナウイルス感染症の影響もあり対象拡大できていないが、より多くの卒業生に還元できるよう方法等の見直しを行っていききたい。</p>	II			
	II	<p>・国際会議抄録(Proceedings)の掲載実績はあったものの、英語論文(Paper)の掲載実績はみられなかった。なお、医学中央雑誌における令和4年度の一人あたり記事数は0.81本/人であり、大学全体の0.77本/人よりは若干高いものの、十分とはいえないので改善を図っていく。</p>	IV	<p>・英語論文の掲載が1件及び掲載決定が1件あり、目標を達成した。このほか国際学会発表が4件あった。徐々に国際学会での発表が復調し始めているので、その成果を学科のブランディングにもつなげていきたい。</p>	IV			

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>○東が丘看護学部 【計画13-1】 全領域で「自ら考え判断し行動できる自律した看護師」の育成を目指し、学生が主体性を発揮できる学習活動（アクティブラーニング）を取り入れた授業（講義・演習）を実施（導入・継続）する。 また、“tomorrow's Nurse”が目指す看護実践能力の基盤となる知識・技術の修得に向けて、毎年20%ずつの演習科目の内容・方法を検討し、令和8年度には全ての演習科目の見直しを行う。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 各領域で新たに取り組むテーマを1つ以上決定し、それに対する行動計画および実施・評価を報告する。令和8年度までには全領域、全科目において検討する。 2. 領域間で情報を共有し、看護過程展開の事例や看護技術項目等の効果的かつ効率的な配置に関する検討を毎年1回ずつ行い、令和8年度の完了を目指す。 「評価指標」 ・アクティブラーニングを取り入れた授業（講義・演習）の実施状況及び演習科目の見直し状況</p> <p>【計画13-2】 ボランティア活動やボランティアサークルが定着し、4年間を通じて学生一人が最低1回はボランティア活動に参加する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 学生会や学生サークルと連携し、学生のリクルートを積極的に行う。 2. コンタクトグループの前後に学生に連絡を行い、情報を周知する。 3. 学生サークルの活動が円滑に行えるようにサポートする。 4. ボランティア活動・ボランティアサークルの推進について、学生会と連携を取り支援していく。 「評価指標」 ・各種ボランティア活動の参加状況</p>	IV	<p>1. 全領域でアクティブラーニングを取り入れた授業（講義・演習）に取り組み、その達成状況はほぼ100%であった。また、全領域の計画・実施・評価に関する資料（全4ページ）を作成し、全領域で共有した。以上2点から、今年度の取り組みは達成率100%とした。</p> <p>2. 全領域で演習科目および技術項目を決定し、方法・内容を見直しに取り組み、その達成状況はほぼ100%であった。また、全領域の計画・実施・評価に関する資料（全4ページ）を作成し、全領域で共有した。今年度は看護過程の展開事例について情報交換を行った。以上2点から、今年度の取り組みは達成率100%とした。</p>	<p>【年度計13-1】 1. 各領域の特性や各科目の学習目標に合わせ、アクティブラーニングを取り入れた効果的な授業計画・展開する。また、各領域で実施しているアクティブラーニングに関する情報を共有する。 2. 看護実践能力の基盤となる知識・技術の修得に向け、各領域で年度内で検討する演習科目および技術項目を決定し、演習内容・方法を見直す。また、各領域での検討内容をカリキュラム委員会でも共有し、全体での調整を図る。 「評価指標」 ・アクティブラーニングを取り入れた授業（講義・演習）の実施状況及び演習科目の見直し状況</p> <p>【年度計画13-2】 1. 学生会や学生サークルと連携し、学生のリクルートを積極的に行う。 2. コンタクトグループの前後に学生に連絡を行い、情報を周知する。 3. 学生サークルの活動が円滑に行えるようにサポートする。 4. ボランティア活動・ボランティアサークルの推進について、学生会と連携を取り支援していく。 「評価指標」 ・各種ボランティア活動の参加状況</p>	IV	<p>1. 全領域でテーマや計画に沿ってアクティブラーニングを取り入れた授業（講義・演習）に取り組んだ（100%）。それぞれのKPI・計画・実施状況および評価（達成度を含む）に関する資料（全4ページ）を作成し、全領域で共有した。以上2点から、今年度の取り組みは達成率100%とした。</p> <p>2. 全領域で演習科目および技術項目を決定し、方法・内容を見直しに取り組んだ（100%）。それぞれのKPI・計画・実施状況および評価（達成度を含む）に関する資料（全4ページ）を作成し、全領域で共有した。以上2点から、今年度の取り組みは達成率100%とした。</p> <p>・コロナ禍も落ち着いてきており、多少の活動制限はみられたが平時の活動に戻りつつある。その一環として、コンタクトグループも対面での活動に移行した。 ・目黒区との地域連携を推進するため10月8日（日）に開催された「第47回目黒区民まつり」に学生ボランティア5名及び教職員3名を派遣した。 ・東京医療センター主催の災害訓練に約110名のボランティア学生を派遣した。また、目黒区消防団に173名登録しており、約450名の東が丘看護学部の学生が4年間で最低1回のボランティア活動に参加するという目標は達成できていると考えられる。今後は年度計画を遂行していくと共に、新規で参加する学生やボランティア活動を増やしていきたい。</p>				

第3期中期計画	令和4年度実績	令和5年度計画	令和5年度計画達成状況	自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
評価区分	評価区分	評価区分	評価区分	評価区分	評価区分
<p>○立川看護学部 【計画14-1】 立川看護学部の「地域から信頼される看護師の育成」を基本とし、新カリキュラムの導入により、高い実践力と判断力を身に着けた看護師の育成を目指し、学生が主体的に学ぶことができるよう、講義・演習・実習を連動させ、これまでの学修成果を見直し、新たな教育手法の導入と改善および教育環境を整備する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 新カリキュラムの導入、及び各領域の特性や学習目標に合わせた教育手法を用い、学生が主体的に学ぶことができる教育環境を整え、効果的な授業を展開する。また、学習成果を可視化し、授業内容の改善を図る。 2. 看護技術項目（令和4年度から導入）の各演習・実習での修得度を評価し、卒業時点での看護技術の修得度を高める。 3. 副専攻「災害看護学コース」の教育を1年次から4年次まで系統的に実施、また、災害医療センターと連携し教育内容の充実を図る。さらに、地域と協働した避難訓練参加などの学習の機会（地域貢献・ボランティア）をもつ。</p> <p>「評価指標」 ・新カリキュラムの導入状況 ・看護技術項目の習得状況 ・災害看護学コースの教育内容充実状況</p>	<p>III 1. 全科目についてアクティブラーニング（AL）の実施状況について調査を行い、実施率は95%で、82%の科目で複数のALが実施されていた。これらの結果を踏まえ、全教員参加によるFDを開催、ALに関する情報共有とディスカッションを行った。ALに関しては、現状の把握と課題抽出ができたことから評価する。 IV 2. 卒業時の看護技術の到達度については、実習検討委員会で分析を行っており、習得状況については情報を共有した。また、各領域で技術経験表にある技術項目を学習するかの確認を行った。講義・演習・実習により、項目ごとの到達度を評価する時期と、技術項目の表記が新カリから変更しており、到達度の評価が適切かどうかを確認することも今後の課題である。 III 3. 令和2年カリキュラムから、災害看護学に関し、必修科目5科目・8単位となっている。災害看護学の科目担当者として、これまでの学修成果について検討を行った。学年進行に伴い、災害看護学Ⅰ～Ⅲで段階的に実践力を高めるものとなっているが、授業内容に重なりがあること、また、総合的な災害に対応する実践力の強化のための知識・技術および地域を見据えた防災・減災の学習が必要であるとの課題が明らかになった。</p>	<p>【年度計画14-1】 1. アクティブラーニングの導入・ICTの活用等について、全科目の20～25%の見直しを行う。 2. 前年度より達成度の割合の増減を評価する。令和8年度の目標値の達成を目指す。 3. 新カリキュラムの進捗状況とともに、災害看護学コースに関連する全ての科目の学修評価・改善に取り組む。毎年、2～3科目の見直しを行う。また、副専攻災害看護学コースに規定された単位数を修了した場合は、修了書を渡す。</p> <p>「評価指標」 ・新カリキュラムの導入状況 ・看護技術項目の習得状況 ・災害看護学コースの教育内容充実状況</p>	<p>III 1. 新カリキュラムの進捗状況：新カリキュラムは1・2年次の学生に提供している。今年度は科目ナンバリング、新カリキュラムのマップとツリーの作成、科目ナンバリング表の作成を行い、カリキュラム全体の総確認をした。結果、新カリキュラムのDPに向けた学習の積み重ね状況を確認・整理し、学修の基盤強化を図る内容を取り入れ、授業ガイダンスにおいて学年進行に伴う学修の積み重ねや科目のつながりについて説明を取り入れた。学生が学習において困難に感じる科目等については2024年度より、初年次教育を開講し、学習のサポートを実施していくこととした。今年度より、学内教員による講義では、ほぼすべての講義でPCを用いた試験を取り入れた。 III 2. 看護技術項目に関しては、全ての実習が終了した4年次生に調査したところ、到達度60%以上の項目が95%であり、到達していない項目は、178項目中9項目（5%）しかなかった。コロナの影響で病棟にいる時間が制限された学年であったものの、その中では十分修得できたと考えられる。 III 3. 副専攻・災害看護学コースでは113名が必要な単位数を獲得し、修了証を授与する。講義内容の重複を解消すること、より総合的な災害に対応する実践力を強化すること、科目間のつながりを重視し学生の学習の進捗を素早く把握してフィードバックすること、振り返りによる学習の積み上げ効果を図るために副専攻の科目運営を看護基盤学が担当することとした。また、DXの推進の一環で災害看護学の演習においてVR教材の開発を行い、災害時特有のリアリティを伴う状況判断力を養う教授方法の特徴を出し、さらに、産学連携並びに災害拠点病院や立川防災基地（防衛省、警察庁、消防庁、立川市）との連携により効果的な授業を展開していくこととした。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画14-2】 学生の国家試験対策や就職支援を強化するとともに、卒業後の支援体制を構築する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 看護師国家試験合格100%をめざす。 2. 8月末までに就職内定90%以上（進学希望者を除く）、卒業時就職・進学率100%をめざす。 3. 卒業後の支援体制を構築する。</p> <p>「評価指標」 ・看護師国家試験合格状況 ・就職内定状況 ・卒業後の支援体制の構築状況</p>	III III I	<p>1. 自己採点結果での判断ではあるが、必須問題はクリアしているが、一般状況設定問題の合格ラインが64%以上なら1名不合格となる。受験勉強していない学生が親の勧めで受験をし、56%しか取れていない。</p> <p>2. 100%就職の内定は頂いたが、卒業前に看護師以外の道を選ぶ学生が出てきたため評価を引き下げた。</p> <p>3. 卒業生のメールアドレスを作成中であるがまだ、3割程度である。更に、就職先も変更している状況であり。連絡先の確保ができていないが、卒業生に演習指導の協力が得られ、本人たちからも「今後も協力したい」という要望が聞かれた。 ・次年度は、連絡先が分かる学生からホームカミングを実施していけるように計画立案する。</p>	<p>【年度計画14-2】 1. 看護師国家試験合格100%をめざす。 2. 8月末までに就職内定90%以上（進学希望者を除く）、卒業時就職・進学率100%をめざす。 3. 卒業後の支援体制を構築する。</p> <p>「評価指標」 ・看護師国家試験合格状況 ・就職内定状況 ・卒業後の支援体制の構築状況</p>	III IV II	<p>1. 本年度は成績不振者の下位20名に対し、業者の講義を入れ、全員合格対策の一つとした。自己採点結果では、受講した学生は全員ではないが合格ラインに入ってきており、受講を進めたが、金銭的理由から受講しなかった学生は、合格点に達していない結果であった。最終的な合格者は110名（97.3%）であり、全国の大卒平均93.5%より高いものの、目標の全員合格には届かなかった。</p> <p>2. 就職に関しては、8月末の時点で内定率78%だったが、報告が遅れている学生に再確認したところ内定率は90%に達し、10月10日時点では94%であった。最終的に1名は看護師に向かないと判断し病院ではなく一般企業に就職したが、他の学生は希望施設へ就職や進学ができたため、目標の100%を達成したと判断した。</p> <p>3. 卒業生支援体制として、3月6日にホームカミングディを初めて実施した。卒業生のメールアドレスが分かる342名に連絡したが、アドレス変更などのためにうまくメールが届かない状況が多く見られた。把握できる卒業生のLINE等も駆使したところ84名から連絡があり、1期生を中心に14名の参加があった（連絡が2月で遅かったので、参加したいがシフトが調整できないという意見が多く寄せられた）。1期生はちょうどステップアップや転職等を考える時期であり、特定行為研修を受講した1期生に受講までの経緯を報告してもらったり、結婚した人や子供がいる人にはワークライフバランスに関する状況を報告してもらうなど、各自が近況報告をし、その内容についてディスカッションすることで様々な環境とその対処方法について考える機会になり好評であった。終了後アンケートでも、参加者の満足度が高かったため、来年度は12月に案内を出し、3月に開催することとした。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議	
	評価区分			評価区分	評価区分			
<p>【計画14-3】㊦</p> <p>立川看護学部が学生支援を充実させる。</p> <p>「計画達成のための方策」</p> <p>1. コンタクト・グループミーティングの出席率を各学年80%以上に維持する。</p> <p>2. 新入生合宿研修での学科プログラムの企画運営を効果的に行い、参加学生の満足度を80%以上にする。</p> <p>3. 医愛祭での立川看護学部の企画イベントで地域に貢献する。両日80名以上の来場者を確保するとともに、学生ボランティア10名以上を確保する。</p> <p>4. ボランティア活動参加の活性化を図る。</p> <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンタクト・グループミーティングの出席状況 ・新入生合宿研修の満足度 ・医愛祭での来場者、学生ボランティア数 ・ボランティア活動の参加状況 	III	<p>1. 前期は全学年80%以上の参加率であったが、後期は4年生の参加率が低下していたため評価を引き下げた。</p> <p>2. 3年ぶりに新入生研修が行われたが、今回は学生支援センターが企画運営し、学部（学科）では企画運営に関与していない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生研修の運営方法の変更に合わせ、計画内容の見直しが必要である。 <p>3. 3年ぶりに令和4年11月5日、6日に医愛祭が行われ、学部（学科）企画を行った。両日とも80名以上の来場者があり、災害に関する認識ができた等の意見が多かった。</p> <p>4. 事務部を通して、立川市、立川警察署、日赤等のボランティア募集のアナウンスができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の各種ボランティアへの参加は増加しているが、個別には現状が把握しきれないため、今後は学生のボランティア参加経験についての現状把握を行う。 ・老人保健施設でのボランティア募集に際し、学生のボランティアの参加応募があった。 	III	<p>【年度計画14-3】</p> <p>1. コンタクト・グループミーティングの出席率を各学年80%以上に維持する。</p> <p>2. 新入生合宿研修での学科プログラムの企画運営を効果的に行い、参加学生の満足度を80%以上にする。</p> <p>3. 医愛祭での立川看護学部の企画イベントで地域に貢献する。両日80名以上の来場者を確保するとともに、学生ボランティア10名以上を確保する。</p> <p>4. ボランティア活動参加の活性化を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動に関する情報提供を年3回以上行う。 ・4年間を通じて学生一人が最低1回はボランティア活動に参加する。 ・医療機関や老人保健施設などにおける学生ボランティアの参加や病院でのコンサートへの参加協力などを、年に1回以上行う。 <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンタクト・グループミーティングの出席状況 ・新入生合宿研修の満足度 ・医愛祭での来場者、学生ボランティア数 ・ボランティア活動の参加状況 	III	<p>1. コンタクト・グループミーティングの出席状況は、前期開催80.5%、後期開催62.2%であった。</p> <p>2. 新入生合宿研修の形態およびプログラムが変更となり、学科プログラムが無くなったため、評価不能である。</p> <p>3. 医愛祭での（学科企画への）来場者、学生ボランティア数・ボランティア活動の参加状況については、令和5年11月4日が114名、5日が74名、計188名の来場者があった。また、学生ボランティアの参加は、ACTへの参加が10名以上あった。</p> <p>4. 学生ボランティア活動は、立川消防団、赤十字奉仕団、立川シテイマラソンなどへの学生の主体的な参加と活発な活動があり、ボランティア活動の活性化が図れた。情報提供は3回以上実施できた。医療機関や老人保健施設などへのボランティアは、コロナ等の関係でまだ控えることにした。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画14-4】 実習施設と大学の連携を図り、より良い実習環境を整備した上で、看護師教育の技術項目に対する卒業時の到達度の達成に向けた指導の実施や、質の高い看護教育の実現に向けて大学・実習施設で共同研究を実施する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 実習施設と大学で実習に関する情報や課題を共有し、課題解決や教育効果向上に向けた検討の機会を持つ。 2. 臨床指導者と大学教員とさらなる連携を図り、看護学実習の目的・目標に沿った教育効果の高い実習を行えるよう実習環境や指導体制について検討する。 3. 看護技術経験表の集計、到達度が未達成(60%未満)の項目について委員会で対策を検討する。また、学生の到達度評価について教員間で共有し、実習指導に活かす。 4. 大学・実習施設で看護教育に関する共同研究を実施し、学術集会で成果発表を行う。</p> <p>「評価指標」 ・看護学実習施設に対する説明会の実施状況 ・看護学実習連携会議の実施状況 ・技術経験表の学生の到達度調査及び内容の検討状況 ・大学・実習施設と実習指導に関連する共同研究状況</p>	IV	1. 6月23日(木)に各実習施設と立川キャンパスで対面・オンラインのハイブリッド形式にて開催した。全体会として2021年度の実習実施報告、臨地実習実施上の工夫や課題について説明し、20施設(来校5施設)から48名の実習担当者が出席した。	<p>【年度計画14-4】 1. 看護学実習施設に対する説明会の実施。(1回/年) 2. 看護学実習連携会議の実施。(1回/年) 3. 技術経験表の学生の到達度調査及び内容の検討。 ・東が丘・立川看護学部看護学科災害看護学コース4年次生の看護技術卒業時到達度達成の到達度60%以上の項目が90%以上。 ・到達度未達成(60%未満)項目の共有及び対策の検討。(1回/年) 4. 大学・実習施設と実習指導に関連する共同研究。 ・大学と実習施設による共同研究の実施。(1回以上/年) ・学術集会での成果発表。(1回以上/年)</p> <p>「評価指標」 ・看護学実習施設に対する説明会の実施状況 ・看護学実習連携会議の実施状況 ・技術経験表の学生の到達度調査及び内容の検討状況 ・大学・実習施設と実習指導に関連する共同研究状況</p>	IV	1. 6月22日(木)にハイブリッド形式にて開催した。実習施設数19施設(対面:6施設、オンライン13施設)実習担当者48名、教員25名が出席した。 2. 12月11日(月)に災害医療センター、村山医療センター、共済立川病院看護部との共催で、ハイブリッド形式にて開催した。 3. 4年次生に調査した。回収率100%。到達度60%未満の項目は、178項目中9項目(5.1%)コロナの影響で実施できてなかった技術がモデル人形で実施できたと転じた項目があった一方で、対人関係やコミュニケーション、家族の状況に関するアセスメントの実施が低い状況があった。コロナの影響で病棟にいる時間が短いなどの実習制限がかかった学年でもあることが影響していると推察された。本結果を実習指導や新人教育等に活かせるよう実習施設に情報共有することも検討する。		
	IV	2. 12月12日(月)に主たる実習施設と連携会議をハイブリッド形式で実施した。教員と実習施設の実習担当者と実習指導に関するディスカッションを行い、交流も図ることができた。		IV	4. 第43回日本看護科学学会学術集会以て「看護系大学と実習施設のシームレスな教育連携の検討ー実践的な看護師教育体制の構築に向けた取り組みー」について実習施設と交流集会を企画・実施した。看護技術教育に関する研究に取り組み「COVID-19下の多様な実習を経験した新卒看護師の実習形態による看護実践能力の違い」について口演にて成果発表を行った。		
	IV	3. 4年次生に調査を実施した。到達度60%未満の項目は、178項目中8項目(4.5%)。感染対策上、留意が必要な技術項目(食事、排泄等)の到達は前年度と同様に到達度が低かった。到達度の低い項目について各領域で到達に向けて検討することになった。		IV	5. 今年度より全領域で実習記録を電子化し、看護技術到達度ポートフォリオもF.CESSで一元化した。また、実習記録の標準化を図った。		
	I	4. 第42回日本看護科学学会学術集会以て「看護系大学と連携実習施設との看護実践力を育むシームレスな教育のあり方」について実習施設と共同で交流集会を開催した。シームレスな卒後教育を見据えた看護技術教育に関する基礎的研究について成果発表(口演・示説)を行った。					
		5. 今年度は臨地での実習ができたため、学内実習のための教材作成には至らなかった。来年度以降に臨地実習が可能になれば、学内実習のための教材作成に取り組みたい。また、VRを利用した教材作りも行う予定である。					

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画		令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分		評価区分		評価区分			
<p>【計画14-5】 立川市消防団機能別分団(立川市学生消防団)活動の活性化を図ることにより、立川市民の安全・安心を護るとともに学生団員自らの災害医療に対する知識と技能、意欲を育成する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 新入生オリエンテーション等の機会を利用して、大学の社会貢献活動の重要性を丁寧かつ適切に伝え、学生が主体性を持って入団することを第一とする。また、活動の様子を広くPRし、社会的に認知されていることを入団の意識付け材料とする。 2. 訓練・行事への出席率向上について、消防団員は『公務員』であるという自覚と責任感を入念するとともに、地域の担い手として地域住民と接することを説明して出席に対するモチベーションアップに繋げる。また、各種訓練等の日程を予め立川市と調整し、学業に支障のないスケジュールを設定する。 3. 上級救命講習の受講について、上級救命講習の概要及び学生消防団にとっての必要性和有効性を説明する。</p> <p>「評価指標」 ・立川市学生消防団に所属する学生数 ・立川市学生消防団における主な訓練・行事への出席状況 ・上級救命講習を受講し上級救命技能認定証の交付を受ける学生消防団員の状況</p>	IV III IV	<p>1. 471名の内、151名(32.1%)が消防団に所属していることから全学部生の30%以上の加入を満たしている。 2. 概ね各訓練・行事への出席率は30%以上を満たしているが、今年度の出初式(1月8日開催)については、成人式に出席する団員が複数いたことから出席率が30%未達だった。 3. 応募期間内に立川市が設けている規定参加枠(60名程度)の人数を満たした。</p>	IV II IV	<p>【年度計画14-5】 立川市消防団機能別分団(立川市学生消防団)活動の活性化。 1. 立川市学生消防団に所属する学生数。全学部生の30%以上加入 2. 立川市学生消防団における主な訓練・行事への出席。平均出席率コロナ禍：約30%以上、ポストコロナ：約50%以上 3. 上級救命講習を受講し上級救命技能認定証の交付を受ける。学生消防団員の10%以上(新設)</p> <p>「評価指標」 ・立川市学生消防団に所属する学生数 ・立川市学生消防団における主な訓練・行事への出席状況 ・上級救命講習を受講し上級救命技能認定証の交付を受ける学生消防団員の状況</p>	IV II IV	<p>1. 立川市学生消防団に所属する学生数は、各学年 32名、39名、34名、37名の計142名であり、全学生数456名の31.1%であった。 2. 1年の任命式は30名(21%)であったが、11月の総合防災訓練は17名(12%) 1月の出初式は20名(19%、4年生は除く)であり、年間の出席率は15%に留まった。ポストコロナに向け、消防団員としての自覚を促し、出席率の向上を図りたい。 3. 上級救命講習の受講者は10名(31%)であり、全団員の資格取得者は67名(47%)となっている。</p>		


第3期中期計画	令和4年度実績	令和5年度計画	令和5年度計画達成状況	自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分		評価区分	評価区分	評価区分
<p>【計画14-6】 立川看護学部が目指す看護師像を情報発信するとともに、立川看護学部の人的リソースによる魅力あるオープンキャンパス、個別見学会等を企画・運営し、参加高校生の満足度を向上させる。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 学生募集部と協働し、広報企画参加者の満足度とニーズに関する量的、質的データを収集できるアンケートを作成し、実施する。 2. 広報企画参加者アンケートの結果を検討して次のオープンキャンパス、ミニオープンキャンパス、個別見学会、入試説明会、大学案内パンフレットなどの内容を検討する。 3. 在校生、教員、事務部職員などの人的リソースを活用した、参加者に近い感覚の学生メッセージ、学生と両親が関心を持てる学部紹介とキャンパスツアー、大学の授業内容に触れる学科企画プログラム、模擬講義、学生や教員によるフランクで楽しい各種プレゼンテーションなどを企画運営する。</p> <p>「評価指標」 ・来校型・WEB型による、オープン・ミニオープンキャンパスの開催状況 ・来校型による、個別見学会の開催状況 ・来校型・WEB型による入試説明会の実施状況 ・出張講座の実施状況</p>	<p>IV 1. オープン・ミニオープンキャンパスを合わせて3回開催した。そのうち2回が来校型とWEB型のハイブリッド、1回が来校型単独であった。来校型の参加者は年間計約700人であった。実施後参加者アンケートには回答者のほとんどが満足と答えた。 IV 2. 個別見学会を来校型学科説明会に機能拡大して開催し、これを含めて学科説明会を計5回、入試説明会を1回開催した。これらへの参加者は年間約300人であった。参加者アンケートには回答者のほとんどが実施後アンケートには回答者のほとんどが満足と答えた。 IV 3. 来校型学校推薦型入試説明会1回、WEB型の高校教員対象大学説明会1回、全学部対象一般選抜入試説明会1回を開催した。参加者アンケートには回答者のほとんどが実施後アンケートには回答者のほとんどが満足と答えた。 4. 出張講座を計5回行った。対象高校の希望で実施後アンケートは行わなかった。しかし、どの回も受講高校生の反応はとて良く、毎回の質問なども活発で、拍手なども盛んに受けた。これらことから参加者満足度は70%以上と判断した。</p>	<p>【年度計画14-6】 1. 来校型・WEB型による、オープン・ミニオープンキャンパスの開催。 ・オープン・ミニオープンキャンパスの開催数。3回 ・オープン・ミニオープンキャンパス参加者。満足度70%以上 2. 来校型による、個別見学会の開催。 ・個別見学会の開催数。3回以上 ・個別見学会の参加者。満足度70%以上 3. 来校型・WEB型による、入試説明会の実施。 ・入試説明会開催数3回以上 ・入試説明会参加者。満足度70%以上 4. 出張講座の実施。 ・出張講座開催数。1回以上 ・出張講座参加者。満足度70%以上</p> <p>「評価指標」 ・来校型・WEB型による、オープン・ミニオープンキャンパスの開催状況 ・来校型による、個別見学会の開催状況 ・来校型・WEB型による入試説明会の実施状況 ・出張講座の実施状況</p>	<p>IV 1. 広報イベントの実施状況 全広報イベント参加者合計：753組（約1520名） 1) 参加者授業体験型オープンキャンパス 目的：参加者が在校生、教員、授業などに直接触れ、本学部を良く知るための学部紹介 計3回 609組（約1220名） 参加者満足度 80% ①3月115組 ②6月189組 ③8月307組 2) 入試説明会 目的：詳しい入試情報を得たい高校生への情報の提供 計2回130組（約260名） 参加者満足度 80% ① 9月 総合型選抜対象 84組 ②10月 学校推薦型選抜対象 46組 3) WEB入試説明会 全学合同の学部紹介 参加者満足度 未調査 ①2023年12月18日～2024年2月28日 約190名閲覧 4) 学科説明会の回数と参加組数 0Cを要約した形の短時間の学部紹介で、個別見学会の規模を拡大して開催。 参加者満足度 80% ① 6月 教員対象 16名 ②11月 一般公募受験者対象 15組（約30名） ③12月 一般公募受験者対象 15組（約30名） 5) 出張講座（高校からの要請に基づく看護職と学部の紹介）の実施校 ただし、参加者満足度は未調査 ①埼玉県立松山女子高等学校（7/13） ②東京都立松が谷高等学校（10/26） ③都立府中高校（12/19）</p> <p>IV 2. 広報イベントへの在学生の年間協力数 1年生：8名、2年生：8名、3年生：21名、4年生：27名</p> <p>IV 3. 広報イベントの成果 参加者アンケートから満足度は非常に高いことが把握された。特に本学部の状況を在校生から直接説明を受け、相談できたことが本学部の状況を把握するうえで、大変良かったという意見が多かった。これらことから広報イベントは大きな成果を上げ、下記の結果を得ていると判断する。 1) 総合型選抜の受験者の広報事業参加率 2023年 受験者数88名中86名参加 98% 2) 学校推薦型推薦選抜の受験者の広報事業参加率 ①公募制 2023年 受験者数50名中48名参加 96% 2022年 受験者数50名中43名参加 86% ②指定校 2023年 受験者数25名中23名参加 92% 2022年 受験者数23名中22名参加 96%</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画14-7】 学生・教職員の研究推進のため、図書室の利用促進を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 図書室の申し込みの手続きを利用者の利便性に配慮して、簡便な方法に改善するとともに、文献利用を促すためのPRを定期的に発信する。また積極的な利用を推進するため、利用者の関心が高まるような新刊図書のPRを行うとともに、文献貸出を促すためのPRを定期的に発信する。</p> <p>「評価指標」 ・ ILL申し込み人数の状況 ・ 立川図書館の貸し出し状況</p> <p>○千葉看護学部 【計画15-1】 未来に向けた主体性を涵養する教育を推進する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 主体的に学修できる仕組みと環境を整備する。 (1) 学生がビジョンに照らして自己評価できるプログラムとしてポートフォリオを導入し、効果的に運用されるよう仕組みを整備する。</p> <p>「評価指標」 ・ ポートフォリオシステムの整備状況、学年別ガイダンスの実施状況、ビジョンについてのポートフォリオの記録回数・実施人数</p>	III IV	<p>1. 図書館月次報告では達成率が76%であった。昨今は無料PDF公開も多くなっていることも要因である。さらに学生は、図書館から文献依頼ができることを知らない学生もいるため、文献依頼の方法を周知していくことが課題である。</p> <p>2. 2月末の時点で19%増の4195冊を達成した。図書の貸し出し数は増加しており、講義や演習、その他国家試験対策等で図書館の利用を促していることが要因と考える。</p>	<p>【年度計画14-7】 1. ILL申し込み人数が令和3年度前期は67件（2～29件/月）を1.25倍の83件を目指し、年間166件をめざす。 2. 立川図書館の貸し出し冊数（図書および雑誌）は令和2年度3,523冊であり、令和5年度もコロナ禍が継続していることから昨年度より2%増の3,594冊（71増）をめざす。</p> <p>「評価指標」 ・ ILL申し込み人数の状況 ・ 立川図書館の貸し出し状況</p> <p>【年度計画15-1】 1. 主体的に学修できる仕組みと環境を整備する。 (1)①LMSを用いた学修ポートフォリオの利用を拡大する。 ②学生に対して定期的にガイダンスを実施し、具体的な履修につながるようにする。</p> <p>「評価指標」 ・ ポートフォリオシステムのトライアル運用に関する評価改善会議（2回）、ポートフォリオに関する学年別ガイダンスの実施（2回）トライアルへの参加人数（20人/学年）</p>	I III	<p>1. ILL申込人数は、3月～2月で52件であった。文献のオンライン化（無料PDF公開を含む）が進んでいるため、ILLの申し込みが減少していることが考えられる。実際に、申し込みのあった約半数の文献が無料PDF公開で入手可能であったためキャンセル扱いになっている。よって、年度計画を一度見直す必要があるかもしれない。</p> <p>2. 貸し出し冊数は、4月～2月で3567件であり、ほぼ目標数に達していた。</p> <p>1. (1) ・ 学修ポートフォリオの運用に関して教務委員会で検討後、申し合わせについて学修支援委員会でも検討を行った。両委員会が共同し、運用申し合わせを作成した（運用検討会議各委員会が1回ずつ開催）。ポートフォリオに関する学年別ガイダンスを2024年2月および3月に計2回行い、1～3年生の各学年複数名の学生が入力を試みた（正確な人数は、システム上教員が把握できず）。令和6年度は評価指標を再検討し、活用を促進する。</p>		

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>(2) 早期から看護職としての意識を高めるため、1年前期から看護の現場での演習を実施すると共に、授業内外で、看護職や人々の健康に関する講演会・イベント等の参加機会を提供するなど、アーリー・エクスポージャーのプログラムを行う。</p> <p>「評価指標」 ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業回数、看護学概論の授業評価、授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等の案内回数、参加人数、学生ボランティアの割合、情報提供の頻度</p>	III	<p>1. (2) ・教員からの講演会やイベントの案内は9回（学内1、学外8）であり、その他学会やイベント等のチラシの掲示が行われており、十分に行われたと考える。参加者数については、学内の地域交流イベントに20名、大学で取りまとめた災害訓練は32名であったが、それ以外は任意参加としており数の把握はできていない。 ・学部の保健医療福祉関係者の授業は1年生14回、2年生8回、3年生4回、4年生1回の計27回、加えてJCHO船橋中央病院の医師らによる疾病や治療に関する講義が上記分を除き67回実施されており、十分に行われている。 ・令和4年度は、4年間のカリキュラム全体を通して、4年次生にDPに照らした評価調査と学習環境に関する評価調査を行ったが、1、2、3年次生や教員への評価調査は行っていない。 ・次年度以降は、評価調査を実施する予定である。</p>	<p>(2)①講演会やイベント、ボランティア募集に関して定期的に情報提供を行う。 ②外部の保健医療福祉関係者の授業の実施状況（特に低学年）を確認し、次年度に反映させる。 ③前年度の評価を受け、①を活用しながら、改善計画を立案する。評価調査の対象として学外の授業関係者からも聴取を行う。 「評価指標」 ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業回数（1回/各学年）、看護学概論の授業評価（肯定的評価が7割以上）、授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等の案内回数（1回）・参加人数（5人/回）、学生ボランティアの割合（5人/回）、情報提供の頻度（3回） ・学外の授業関係者からの聴取（1回）</p>	IV	<p>1. (2) ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業は、各学年複数回行われた。 ・看護学概論の授業評価は、肯定的評価が7割以上であった。 ・授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等は、1回以上行われた。本学非常勤教員の看護倫理に関するトークイベントには、1年生が複数名参加した。また、3月24日に開催した地域交流イベントにおける船橋中央病院の医療従事者による講演会には、5名以上の学生が参加し、学生ボランティアは40名以上が参加した。</p>				
	III	<p>1. (3) ・入館延べ人数は前年比122%、学部学生、大学院生の資料貸出延べ数は前年比161%であった（令和5年2月末時点）。 ・学部4年生科目「看護研究」の希望領域を対象に、文献検索ガイダンスを実施した。 ・スタディスキルズ動画4本を作成・配信したが、アクセス数100にとどまった。また、1年生科目担当者からは、スタディスキルズに関する質問への個別対応件数が多いという情報もあった。次年度は、学生が当該スキルを要すタイミングで、科目担当者より動画視聴を促して頂くよう、FD報告会で教員に向けて動画内容を紹介した。 ・4年生には国家試験関連ガイダンス等6回、模試6回、有料講座I、II、講座等を実施した、任意有料講座受講者103人/104人（昨年81人/105人）となった。自己学習室も105学生ホールを開放し、感染予防を行いながら、毎日複数の学生が利用していた。 3、2年生は任意受験模試を実施したが、2年生は100%受験、3年生は1人のぞき全員が受験した。</p>	<p>(3)①～④前年度の点検評価を行い主体的な学修を支援する環境整備の視点から改善点を提案する。 「評価指標」 ・附属船橋図書館の入館者数、貸出件数が、前年度より増加する ・国家試験対策支援への参加者数増加状況</p>	IV	<p>1. (3) ・入館延べ人数は前年比130%、学部学生・大学院生の資料貸出延べ数は前年比110%であった。（2月末時点の比較） ・学部4年生科目「看護研究」の希望領域を対象に、図書館司書の協力により、文献検索ガイダンスを実施、大学院生向けにも同様の動画視聴の機会を設けた。 ・国家試験対策支援として、模試、ガイダンス、有料講座等を実施した。 【模試】 2年生：2回実施し、全学生102人が受験した。 3年生：2回実施し、全学生115人が受験した。 4年生：保健師模試も含め8回実施し、対象学生全員105人、20人が受験した。 【ガイダンス】 2年生：3回実施した。学修方法や国家試験理解の促進、模試の振り返りを行った 3年生：3回実施した。模試の振り返りや学修方法を行った。 4年生は、6回実施した。 模試、ガイダンスの他に、4年生には有料講座を実施し、105人が受講した。</p>				
	III	<p>2. 入学試験合格者に対する学修支援を入学前に開始する。 入学前からの学修に対する主体性涵養をめざし、主として推薦試験による入学生を対象に、入学前準備プログラムを構築・実施する。 「評価指標」 ・入学前準備プロジェクトの参加者数、参加者への入学後アンケート調査結果、入学後の学業成績の分析結果状況</p>	<p>2. 総合型選抜及び学校推薦型選抜による入学予定者63人を対象とした入学前準備プログラムを継続実施した。「大学での学修を知ろうpart2（対面）」は、53人が参加した。協力学生からは入学予定者の質問に応えることができたという評価をもらった。 ・令和4年度入学生の入学後のアンケート結果では、対象者60人おなかで、不参加者38名。不参加理由は日時が合わなかった（28名）であった。 令和5年度入学生対象の日程は、卒業式が3月を避け、祭日としたところ53名/63名の参加となった。令和5年度入学予定者対象アンケートは令和5年度4月に行う予定である。 ・また、総合型選抜による入学予定者17人の内、地域交流イベントに11人が参加した。 ・入学前準備プログラム受講者への入学後の主体性獲得状況調査は行うことができなかった実施についての検討を継続する。</p>	<p>2. 入学試験合格者に対する学修支援を入学前に開始する。 ①～③前年度と同様 ④一般入学試験合格者に対する入学前プログラム実施についての検討を行う。 「評価指標」 ・令和3年度比、入学前準備プロジェクトの参加者数10%増加 ・前年度比、プログラムに対する肯定的評価の割合増加</p>	IV	<p>2. 11月25日（土）に総合型選抜地域指定（千葉）の入学予定者向けに「千葉での実習を知ろう」をテーマに、本学部で行われる千葉県内フィールドに焦点をあてた4年生4名との交流会を実施し、対象者16名中14名の参加を得た。 ・2月23日（金）に総合型選抜地域指定（千葉）および学校推薦型の入学予定者向けに、「大学での学修を知ろう：計画的な学習と学生交流」を開催した。対象者54名中参加希望者47人で、参加者は44人であった。 ・3月24日（日）千葉看護学部の地域交流イベント企画として、総合型選抜地域指定（千葉）、学校推薦型、一般入試の入学予定者100人を対象に「大学での学修を知ろう 地域交流イベントへの参加と学生交流」を実施した。参加希望者53人で、参加者は49人であった。</p>			

第3期中期計画	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="557 310 611 392">評価区分</td> <td data-bbox="611 310 1237 392">令和4年度実績</td> </tr> </table>	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="1608 310 1662 392">評価区分</td> <td data-bbox="1662 310 2288 392">令和5年度計画達成状況</td> </tr> </table>	評価区分	令和5年度計画達成状況	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="2288 310 2341 392">評価区分</td> <td data-bbox="2341 310 2531 392">自己点検・評価委員会</td> </tr> </table>	評価区分	自己点検・評価委員会	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="2531 310 2585 392">評価区分</td> <td data-bbox="2585 310 2769 392">内部質保証推進会議</td> </tr> </table>	評価区分	内部質保証推進会議
評価区分	令和4年度実績												
評価区分	令和5年度計画達成状況												
評価区分	自己点検・評価委員会												
評価区分	内部質保証推進会議												

第3期中期計画	令和4年度実績	令和5年度計画	令和5年度計画達成状況	自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
評価区分	評価区分	評価区分	評価区分	評価区分	評価区分
<p>3. 学生の主体的に学ぶ意欲と方法の獲得を支援する機会として、授業以外での学修機会の提供や学修活動を支援する。 医療・福祉の現場に関わる機会、健康関連イベントへの参加機会、ボランティア情報の周知及び活動発表やフィードバックを受ける機会の設定を行い、それぞれの学修機会と参加学生を増加させる。 【評価指標】 ・提供された学修機会の数、学生の参加人数、参加学生からのフィードバックの状況</p> <p>【計画15-2】 学生主体の教育における多様性に対応した教育を推進する。</p> <p>【計画達成のための方策】 1. 多様な教育ニーズに対応する。学生の能動的な学修を促すために必要な資機材の整備を行うとともに、教育内容や方法を教員間で共有しアクティブラーニングを推進する。その場合、fGPAなども活用し常勤教員が担当する講義・演習科目を中心に、基礎及び発展的な内容の提示や習熟度別クラスの導入等を行うことにより、授業形態に関わらず、全科目で双方向性の担保と学生の授業参加を促す。 【評価指標】 ・ICT活用科目数、アクティブ・ラーニングを取り入れた科目数、各科目での成績評価結果、各科目での学生からのフィードバック、授業評価アンケート結果、教員間での情報共有機会の数</p> <p>2. 学生等の多様性に対する教職員の理解を促進する。 (1) 教職員の多様性への理解を向上させ、多様性に配慮した授業運営を行う。 (2) 教職員に対し、多様性に関する研修や情報共有の機会を定期的に設ける。 【評価指標】 ・多様性に関する研修・情報共有機会の数、教員へのフィードバック調査の結果、授業評価アンケート結果</p>	<p>III 3. 学生を対象とした調査は実施しなかった。学部が提供した学生の課外活動の機会は、医愛祭と地域交流イベントだった。医愛祭には2日半で述べ29名、地域交流イベントには1日で64名の学生が参加した。課題は、コロナ禍における活動や参加の制約（実習による）が最も大きいと考えられた。②地域交流イベントの参加学生数は昨年度より減少したが、子どもを対象とした2つの新企画に学年を超えて学生が参加し、縦の交流を促進できた。参加学生による評価は、項目を含め次年度検討する。</p> <p>IV 1. COVID-19への対応の継続及びDX化が推進され、ほぼすべての科目でLMSが利用されるなど学部内でのICTの利活用等はほぼ浸透したといえる。また、「ウイズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業（令和3年度補正）」により多目的DXルームを整備し、これらの設備の説明会、勉強会も各1回開催されるなど、アクティブラーニング環境の整備も進んだ。</p> <p>IV 2. FD委員会と共催で、「学生の個別ニーズに応じた相談支援研修」を8月24日に開催した。</p>	<p>3. 学生の主体的に学ぶ意欲と方法の獲得を支援する機会として、授業以外での学修機会の提供や学修活動を支援する。 ①授業以外の学修機会に関する情報提供と参加支援を行う（医療・福祉現場での活動、健康関連イベント、ボランティア活動、等） ②上記参加後の活動発表やフィードバックを提供する機会を設定する。 【評価指標】 ・令和3年度比、提供された学修機会と参加学生数の5%増加 ・前年度比、活動参加に対する肯定的な評価の割合増加</p> <p>【年度計画15-2】 1. 多様な教育ニーズに対応する。 ①授業の目標を達成できる各種の授業方法を取り入れ、学生の理解を把握し成果を評価する。 ②学生の反応を確認しながら、DXを活用したアクティブラーニングを積極的に導入する。 ③上記の他、各科目において、学生のニーズを把握し可能な範囲で対応する。 【評価指標】 ・令和3年度比、ICT活用科目数、アクティブ・ラーニングや習熟度別クラス等の工夫を取り入れた科目数4%増加 ・教員向けに関連する研修の開催状況</p> <p>2. 学生等の多様性に対する教職員の理解を促進する。 学生等の多様性をテーマとした教職員研修、カリキュラム評価・授業評価報告において学生の多様性への対応を視点とした評価を実施する。 【評価指標】 ・令和3年度から継続して多様性に関する研修・情報共有機会の提供状況</p>	<p>IV 3. 学生を対象とする調査は実施しなかったが、課外活動の機会として、①医愛祭は2日間で17人、②地域交流イベントへの参加者は74人、③ふなばし健康まつりボランティアでの参加は32人、「からだのお話し会企画」運営は7人、④市川市マナフェスへのボランティア参加は40人、「からだのお話し会企画」は7人、⑤認知症サポーター養成講座学内開催の参加者は14人であった。</p> <p>III 1. 常勤教員の担当科目では、ほぼ全科目ICTを活用している。全開講科目のうち93科目（75.7%）でアクティブラーニングを取り入れたている。 ・若手教員が大阪大学の授業設計に関するオンデマンド研修を受講したり、関心のある所属領域以外の授業を見学し、その成果を発表会で共有した。</p> <p>IV 2. カリキュラムプロジェクトとFD担当の共催によるFD研修会を8月17日および3月14日に実施し、カリキュラム改正について検討するとともに、学生の多様性への理解を深めるとともに情報を共有した。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画15-3】 第2期中期目標・計画における教育の評価を行い、DP及び社会ニーズの変化に応じたカリキュラムへの改定を行う。</p> <p>「計画達成のための方策」 教育活動と成果の点検評価及び改善活動を行う。 学生からの授業評価並びにそれに対する教員の自己評価、各会議での検討等に基づき、大学院DPに照らした点検評価を行い、CP、APおよびDPの改定に向けた準備を行う。</p> <p>「評価指標」 ・検討会の開催回数、成果物としての新カリキュラムの有無と内容</p> <p>【計画15-4】  学生の主体性を涵養する教育を推進する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 教育DX化と並行して、学生が自己の学修活動を記録し振り返ることが可能な仕組みを準備し、年に1回以上、学生自身が学修活動について振り返り、その後の自らの目標について考えることができるよう指導する。</p> <p>【評価指標】 ・学修活動の記録と目標についての自己評価を、各学年のほぼすべての学生が実施する（1回/年）</p>	III	<p>1. 4月に将来構想委員会の下部組織として、カリキュラム評価プロジェクトを立ち上げ、カリキュラム評価に関する拡大会議の後、①DPとのシラバス照合、②全科目の授業評価アンケートの分析、③4年生卒業時カリキュラム評価アンケート、④現行カリキュラムの看護学教育モデルコアカリキュラムとの照合点検（全教員参加）を行い、3月にFD報告会を開催した。また、プロジェクトメンバーで、現行カリキュラムにおいて改善が急がれる事項を全領域から聞き取り、教務委員会に①4年次4月の時間割の過密の緩和、②統合実習の運営方法の改善（教務委員会着手中）、③精神医学の学修を組み入れる必要性などについて申し入れ、教務委員会により対応が始められている。 ・令和5年度は、カリキュラム改定に向けたワーキングに発展させていくことが課題である。</p>	III	<p>【年度計画15-3】 1. 教育活動と成果の点検評価及び改善活動を行う。 ①前年度までの評価をもとに、令和8年度（開設9年目）からの新カリキュラム運用に向けたカリキュラムワーキング検討会（年1回）を開催する。 ②前年度の改善点の検討ら、授業内容や時間割変更で改善可能な点について、改善状況を情報共有し、前年度同様に年度末の資料を加えて、DPの達成状況を含めた点検評価を行う。 ③卒業生とその就職先を対象とした調査を行い、卒業後のニーズからみたカリキュラムおよび教育方法の評価を行う。 ④FD研修会として、看護学の学士課程のカリキュラムの多様性や私立大学の看護学教育において実現可能なカリキュラムについての研修を行う。</p> <p>「評価指標」 ・検討会・評価会議・研修会の開催各1回、卒業生を対象とした調査結果、教員を対象としたFD研修による学びのレポート内容、成果物としての新カリキュラムに向けた改善内容の提言</p> <p>【年度計画15-4】 1. LMSを用いた学修ポートフォリオの実施について記載フォームを検討し、令和5年度より試行することとして準備した。</p> <p>【評価指標】 ・学修活動の記録と目標についての自己評価を、各学年のほぼすべての学生が実施する（1回/年）</p>	III	<p>1. ①～④令和4年度のカリキュラム評価プロジェクトをカリキュラムプロジェクトとして発展継続し、実習前OSCE、実習前CBTの導入を視野に入れた改正カリキュラムの実現に向けた検討を開始し、8月および3月に全学部教員対象のFD企画を行い、文部科学省の看護学教育・モデル・コア・カリキュラム改正ならびに実習提携関係にあるJCHO船橋中央病院の移転を視野にいれたカリキュラム改正の準備に着手した。 ・年度末資料を加えたDP達成状況の評価から、教務委員会主導で、看護管理に焦点をあてた統合実習を2025年度より看護学全体の学びを統合する実習へと変更することとし、準備を開始した。 ・卒業生とその就職先を対象とした調査は未実施である。 ・3月の全教員対象のFD企画において新カリキュラムに向けての課題を整理した報告文書を提示した。</p> <p>1. ポートフォリオに関する学年別ガイダンスを2024年2月および3月に計2回行い、1～3年生の各学年複数名の学生が入力した（正確な人数は、システム上教員が把握できず）。 ・次年度は、より、多くの学生が入力するよう推進するとともに、評価指標を再検討する。</p>	

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画		令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分		評価区分		評価区分			
<p>2. 千葉看護学部のビジョンに共鳴する受験生を確保する。学生がビジョンに照らして自己評価できるプログラムを作成し、本学部のビジョンを具現化するために入学前から継続した教育・学生支援を実施する。</p> <p>【評価指標】 ・オープンキャンパス実施回数（5回/年）・参加人数（定員8割以上）・参加者アンケート内容、入学前準備プログラムの参加人数（対象者の7割以上）・参加者アンケート内容（肯定的評価が7割以上）、学年別ガイダンスの実施状況（4回/年）、ビジョンについてのポートフォリオの記録回数（1回/年）・実施人数（ほぼ全ての学生）、学生ボランティアの割合（5人/回）、情報提供の頻度（3回/年）</p>	IV	<p>2. 地域交流イベントで企画した2つの公開講座に関して、3名の学生が運営を手伝った。船橋市が5月に募集する1年間のボランティア情報を年間通じて学生に提示した。 ・オープンキャンパス・学部説明会計7回実施、参加人数計518組（R3年度410組）、参加者のアンケート内容は「学部の特色が良く理解できた」「是非入学したい」など肯定的なものが多いであった。 ・入学前準備プログラムのうち「大学での学修を知ろうpart2」はオンラインから対面とし継続実施した。参加者アンケートは入学後に実施する計画を立案し準備している。また、学校進線型入試、および総合型選抜での入学予定者の高校（校長）すべての入学前準備プログラムの資料を送付し、その周知を図った。 ・各学年、各セメスター開始時、終了時に履修ガイダンス・履修指導を行ったほか、1年生には定期試験に向けたガイダンスを追加で行った。</p>	<p>2. a. 受験生対象の学部説明において本学部のビジョンをわかりやすく説明し、参加者の反応を把握し、必要に合わせ改善する。 b. これまでの入学前準備プログラムを継続しつつ、参加者アンケートにてよりニーズに合うプログラムにする。また、学校選抜型入試での入学予定者及び、その高校（校長）に入学前準備プログラムを周知する。 c. 学生に対して定期的にガイダンスを実施し、具体的な履修につながるようにする。 d. 講演会やイベント、ボランティア募集に関して定期的に情報提供を行う。</p> <p>【評価指標】 ・オープンキャンパス実施回数（5回/年）・参加人数（定員8割以上）・参加者アンケート内容、入学前準備プログラムの参加人数（対象者の7割以上）・参加者アンケート内容（肯定的評価が7割以上）、学年別ガイダンスの実施状況（4回/年）、ビジョンについてのポートフォリオの記録回数（1回/年）・実施人数（ほぼ全ての学生）、学生ボランティアの割合（5人/回）、情報提供の頻度（3回/年）</p>	III	<p>2. a. オープンキャンパスや学部見学会等を計7回実施し、参加者は515名であった（同伴者含まず）。参加者のアンケートからは、本学部のことがよく理解できた、志望校選択に役立ったなどの感想が多数挙がった。 b. 学校推薦型の入学予定者の所属高校の校長にも入学前準備プログラムの資料を郵送し、周知を行った。 また、2023年度入学生で学校推薦型での入学予定者に、入学前準備プログラムの参加可否とその理由についてアンケートを行い、47人より回答を得た。学習計画は35人が作成したがそのうち15人は途中でやめていた。入学前準備プログラムに参加して34人が聞きたいことが聞けたと回答した。さらに、大学からの情報は郵送資料の次に、LINEオープンチャットから得ていたことが分かり、2023年度も高校生が情報にアクセスしやすいLINEを利用し、プログラムに関する情報の提供を行った。 c. 学修支援委員会にて、各学年ごとにセメスター開始と終了時にガイダンスを行った。 入学後全学共通のポートフォリオを関連づけられるか再検討し、評価指標を検討する。 d. 大学に届く講演会等のお知らせは事務部より掲示してもらったが、各教員のもとに届く講演会やイベント情報を学生に周知するまでには至っていなかった。また、ボランティア募集に関しては、科目の事前学習にしたことで、参加が促進した。</p>			
<p>3. 早期から看護職としての意識を高めるため、1年前期から看護の現場での演習を実施すると共に、授業内外で、看護職や人々の健康に関する講演会・イベント等の参加機会を提供するなど、アーリー・エクスポージャーのプログラムを行う。</p> <p>【評価指標】 ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業回数（5回/年）、看護学概論の授業評価（総合評価が4以上）、授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等の案内回数（1回/年）、参加人数（5人/回）</p>	III	<p>3. 学部の保健医療福祉関係者の授業は1年生14回、2年生8回、3年生4回、4年生1回の計27回、加えてJCHO船橋中央病院の医師らによる疾病や治療に関する講義が上記を除き67回実施されており、十分に行われている。1年次前期の看護学概論における見学演習を継続した。将来構想委員会のカリキュラム評価プロジェクトにより、4年次学生へのアンケートならびに専任教員全員に対するヒヤリングを行った。 地域交流イベントにおいて、船橋中央病院の院長・栄養士・看護師による食事と嚥下に関する公開講座1、および白梅学園大学子ども学部教授によるヤングケアラーに関する公開講座2を開催した。それぞれ34名、35名の参加者があった。 教員からの学外の講演会やイベントの案内は8回であり、その他学会やイベント等のチラシの掲示が行われており、十分に行われたと考える。参加者数については、大学で取りまとめた災害訓練は32名であったが、それ以外は任意参加としており数の把握はできていない。</p>	<p>3. a. 外部の保健医療福祉関係者の授業の実施状況（特に低学年）を確認し、次年度に反映させる b. 前年度の評価を受け、①を活用しながら、改善計画を立案する。評価調査の対象として学外の授業関係者からも聴取を行う。 c. 講演会やイベント、ボランティア募集に関して定期的に情報提供を行う。</p> <p>【評価指標】 ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業回数（5回/年）、看護学概論の授業評価（総合評価が4以上）、授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等の案内回数（1回/年）、参加人数（5人/回）</p>	III	<p>3a. 外部の保健福祉関係者の授業の実施状況（第一回目）アンケートを実施中（集計はこれから）。第二回目のアンケートでは保健医療関係者についてデータ収集を実施する。 c. イベント（ふなばし健康まつり、地域交流イベント、マナフェスの情報提供を行った。また、認知症ケアサポーター養成講座を開催し、12名の学生、2名の教職員の参加があった。 ・次年度は、より体系的に実態を把握できるようなしくみを検討する。</p>			

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画15-5】 生涯学習支援を継続する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 学部における生涯学習支援を継続し、これが大学ビジョンに向かうものとなっているかを評価し、改善するためのICTを活用した基盤を整備する。</p> <p>【評価指標】 ・当該目標に関する検討会開催回数と参加人数、評価のための仕組み作成状況と実施状況</p> <p>2. 卒業生を継続してサポートできる仕組みを整備し、学びの機会を提供する。</p> <p>【評価指標】 ・卒業生の連絡先を管理する仕組みの作成と登録状況（100%）、年2回のメールマガジンの発行、講演会等の案内回数（年2回）と参加人数（各回50%）</p> <p>3. 実習指導者講習会およびフォローアップ研修会、受講施設管理者を対象とした研修・情報交換を開催し、千葉県内の実習指導者育成と質の向上に貢献する。</p> <p>【評価指標】 ・実習指導者講習会参加人数（募集定員の120%）、修了時の満足度（70%以上）、フォローアップ研修の参加人数（50%以上）、受講施設管理者を対象とした研修・情報交換の参加人数、自施設の実習指導の質向上についての評価</p>	I	<p>1. 当該目標に関する検討会は開催しなかった。評価のための仕組み作成にも着手することができなかつたため、次年度の将来構想委員会の課題とする。</p>	<p>【年度計画15-5】 1. 前年度には検討を行うことができなかったため、将来構想委員会内に担当を設け、前年度予定であった活動を開始する。これにより、千葉看護学部における、卒業生と大学、大学と社会をつなぐありようをイメージ化し、千葉看護学部が生涯学習支援の場となるために必要な要素や仕組み（インフラ、ソフトシステム、広報、他機関との連携、等）と、そのために強化すべき機能（教材・資源の共同利用のためのアーカイブ整備、等も含め）に関する検討会を開催する。（1回） ・実践経過と成果の蓄積と分析による評価・改善が可能となるよう、各種活動時にデータ収集したい共通項目を洗い出し、アンケート項目を作成し、ICTを活用した仕組みを検討する。</p> <p>【評価指標】 ・当該目標に関する検討会開催回数と参加人数、評価のための仕組み作成状況と実施状況</p>	III	<p>1. 当該目標に関する検討会は開催できていないが、将来構想委員会において、卒業生担当を置き、学生生活支援委員会主催で、地域交流イベントと同時開催で、「ホームカミングデー」を実施した。生涯学習支援の仕組みを検討するために、プロジェクトメンバーの選出し、シミュレーションを用いた生涯学習支援を検討しており、シミュレーション実施教室の環境を整備した。次年度は、「卒業生チャレンジ」（卒業生に声をかけて、DXについての研修を行う企画）を開始する予定である。</p>		
	III	<p>2. 卒業生の連絡先登録は、3/15時点で70%であり、登録を促す連絡を行っている状況である。メールマガジンは3月中に2回目の発行を予定している。地域交流イベントにおいて開催した2つの講演会の案内はメールマガジンで情報連携したが、卒業生の参加は2名程度であった。連絡先管理の仕組みは整備できたが、全員登録は任意性を鑑みて現実的ではないとも考えられる。次年度以降は、登録90%程度を目指す。講演会への卒業生の参加は、コロナ禍の影響も大きいと考えられる。次年度は将来構想委員会による卒業生を対象としたイベント開催も合わせて企画を検討し、早めの情報提供を行う。</p>	<p>2. 前年度末にとりまとめた改善策を反映した卒業生の連絡先管理および継続教育支援の方法を実践し、年度末に現状と改善策をとりまとめる。</p> <p>【評価指標】 ・卒業生の連絡先を管理する仕組みの作成と登録状況（100%）、年2回のメールマガジンの発行、講演会等の案内回数（年2回）と参加人数（各回50%）</p>	III	<p>2. 卒業生の連絡先登録は12月から呼びかけて91.7%であり、さらに早い時期から呼びかける必要がある。メールマガジンは年2回発行し、発行後にメールアドレス変更を連絡してきた卒業生が数名確認できた。2023年度は初の試みとして、3月の地域交流イベントにてホームカミングデーを開催し、9名が参加した。また、ホームカミングデーにて、アンケートを実施した（9名回収）。参加者を増やすために、卒業生が関心を持つ企画を検討する必要がある。</p>		
	IV	<p>3. 実習指導者講習会（30日間コース）については、40名定員のところ48名の受講（募集定員の120%）となり、目標を達成することができた。ただし、7日間コースについては40名定員のところ受講者は18名（募集定員の45%）と、目標を大幅に下回っている。コロナの感染拡大により、訪問看護ステーションからの申し込みキャンセルなども複数あり、今後の感染収束後の受講者の動向を確認する。フォローアップ研修については対面で実施したものの、27名が参加（56.3%）し、目標は達籍で来たと考える。なお、上記3研修ともに終了時の受講生アンケートでは、満足度したとの回答がおおむね90%を超え、100%を達成する項目も多数存在しており研修内容の担保については目標を達成したものと考えられる。</p>	<p>3. 事務局と連携し、実習指導者講習会、フォローアップ研修、受講施設管理者を対象とした研修・情報交換を企画・周知・実施し、実績と改善策を取りまとめる。</p> <p>【評価指標】 ・実習指導者講習会参加人数（募集定員の120%）、修了時の満足度（70%以上）、フォローアップ研修の参加人数（50%以上）、受講施設管理者を対象とした研修・情報交換の参加人数、自施設の実習指導の質向上についての評価</p>	IV	<p>3. 実習指導者講習会参加人数は30日間コースは定員40名のところ49名の受講（募集定員の123%）となり、目標を達成することができた。ただし、7日間コースについては40名定員のところ受講者は24名（募集定員の60%）と、目標を大幅に下回っている。ただ、昨年度よりは増えているため、今後さらなる受講者の増加のための取り組みを行っていく。フォローアップ研修については対面で実施したものの、34名が参加（69.4%）し、目標は達成できたと考える。なお、上記3研修ともに終了時の受講生アンケートでは、満足度したとの回答がおおむね90%を超え、100%を達成する項目も多数存在しており研修内容の担保については今年度も目標を達成したものと考えられる。</p>		

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>4. 主として千葉県北西部及びJCHOの看護・介護職者等に向けた生涯学習機会を提供する。</p> <p>【評価指標】 ・千葉県内及びJCHOからの講師依頼内容・件数、本学部主催または共催（有志含む）による研修会等の開催回数・参加者、満足度</p> <p>【計画15-6】 教員の研究力の向上を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 教員の研究活動の情報交換会を定期的に継続する。 【評価指標】 ・情報交換会の開催回数（1回／年以上）</p>	IV	<p>4. 千葉県看護協会からの講演依頼は下記合計5件である。 「看護管理ビギナー研修」「タイムマネジメント研修」「認定看護管理者教育課程セカンドレベル」2件 「認定看護管理者教育課程サードレベル」 ・JCHO本部からの講演依頼は下記5件である。 「認定看護管理者研修セカンドレベル（人材育成）」 「同（医療安全）」他、3件 「JCCHO保健師助産師看護師実習指導者講習会（実習指導方法）」 ・JCHO船橋中央病院からの講演依頼は下記合計3件である。 「令和4年度新卒看護職員研修」 「ラダーⅢ研修（看護研究の講義と研究指導）」 「看護研究支援」 ・JCHO東京山手メディカルセンターからの講演依頼は下記1件である。 「看護研究の講義と研究指導」 ・JCHO埼玉メディカルセンターからの講演依頼は下記1件である。 「看護研究指導」 ・本学部主催または共催の研修はなかった。</p>	<p>4. 実習指導者講習会やJCHO本部・各病院に対して、教員の研究内容、講演できる内容などを周知する。研修会や講師依頼などの実績を年度末に取りまとめる。 【評価指標】 ・千葉県内及びJCHOからの講師依頼内容・件数、本学部主催または共催（有志含む）による研修会等の開催回数・参加者、満足度</p> <p>【年度計画15-6】 1. 定期FD研修やイブニングセミナーで教員の研究活動について情報共有を行う。 【評価指標】 ・情報交換会の開催回数（1回／年以上）</p>	IV	<p>4. 実習指導者講習会やJCHO病院との会議等の機会に、教員の研究内容、講演できる内容等の周知を行った。学習機会の提供に関する今年度の実績は次のようである。 ◎周辺地域機関からの依頼 ○千葉県看護協会：「千葉県看護研究会研究相談員」「看護管理ビギナー研修」「認定看護管理者教育課程ファーストレベル」「認定看護管理者教育課程セカンドレベル」3件 ○千葉県がんのリハビリテーション研修会実行委員会：「がんリハビリテーション研修会」 ○海神在宅看護支援センター：「都疎浜地区自治会生き生きくらぶ：体力測定・講師」 ○板倉病院：「こども食堂」 ○船橋市：「ふなばし健康まつり」 ○市川市：「マナフェス」 ○東京都訪問看護ステーション協会：「訪問看護実習指導者研修」 ○特別区男女共同参画センター：「地域連携研修、困難事例スーパーヴァイズ」 ◎JCHOからの依頼 ○JCHO本部：「認定看護管理者研修サードレベル」「認定看護管理者研修セカンドレベル」4件「JCCHO保健師助産師看護師実習指導者講習会」6件 ○JCHO船橋中央病院からの講演等依頼 「新卒看護職員研修」「ラダーⅢ研修」「看護研究支援」 ○JCHO東京山手メディカルセンター：「看護研究の講義と研究指導」 ○JCHO埼玉メディカルセンター：「看護研究指導」 ○JCHO東京山手メディカルセンター：「看護研究指導」「看護研究発表会講評」 ◎大学が企画した地域住民・専門職者を対象とした勉強会等 ○令和5年度東京医療保健大学千葉看護学研究科・和歌山看護学研究科共催公開講座</p>	IV	<p>1. 3月13日に実施した学部活動報告会において、教員の研究活動・社会活動に関するポスター展示及び情報交換会を実施した。</p>		

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>2. 学会（国際・国内）で、研究成果を発表を促進し、発表する。 【評価指標】 ・国際学会参加人数（1人／年以上）、国際学会発表者人数（1人／年以上）、国内学会発表者割合（年間7割）</p> <p>3. 研究成果を査読のあるジャーナルへの投稿を促進し、採択される（共同執筆含）。 【評価指標】 ・採択者人数、採択者割合（国際・国内、年間で全教員数のうち4割以上）</p> <p>○和歌山看護学部 【計画16-1】 「大学での主体的な学び方の体得」及び「地域を理解する科目の充実」、「地域への愛着形成の支援」を図る。</p> <p>【計画達成のための方策】 1. 主体的な学習に取り組めるために必要なカリキュラムと機会を充実する。 2. 入学初期に主体的な学び方に関する科目と地域への関心を高めるための科目を設定する。 3. 卒業後も学び続けるための支援体制を構築する。</p> <p>【評価指標】 ・カリキュラム実施状況 ・愛着の程度を把握</p>	III	<p>2. 国際学会参加人数：9人、国際学会発表人数：3人 国内学会参加人数：24人 国内学会発表人数：12人 学部活動報告会での情報共有は実施されなかった。</p> <p>3. 論文（国内）採択人数：11人15件 論文（海外）採択人数：2人2件 学部活動報告会での情報共有は実施されなかった。</p>	<p>2. 年度末の学部活動報告会で国際学会及び国内学会で発表した教員について情報共有を行う。 【評価指標】 ・国際学会参加人数（1人／年以上）、国際学会発表者人数（1人／年以上）、国内学会発表者割合（年間7割）</p> <p>3. 年度末の学部活動報告会で論文採択された教員について情報共有を行う。 【評価指標】 ・採択者人数、採択者割合（国際・国内、年間で全教員数のうち4割以上）</p>	IV	<p>2. 国際学会参加人数：8人 国際学会発表人数：6人 国内学会参加人数：34人 国内学会発表人数：22人/36人（61.1%） 学部活動報告会で情報共有を実施した。</p> <p>3. 論文（国内）採択人数：17人28件 論文（海外）採択人数：6人11件 国内・海外のいずれかに採択された人数：17人/36人（47.2%） 学部活動報告会で情報共有を実施した。</p>				
	<p>【年度計画16-1】 1. 「大学での主体的な学び方の体得」、「地域を理解する科目の充実」に関する科目の実施・評価する。 2. 先輩学生からの学習経験をもとに、学習計画を立て実行する。 3. 主体的な国家試験への取り組みへの支援を行う。 4. 実習指導者との相互理解により学生の主体的な学びをサポートする。 5. 学生の学びにタイムリーな図書を紹介をし、利用を促進する。 6. 卒業生の自己研鑽のための支援を試行する。</p> <p>【評価指標】 ・カリキュラム実施状況 ・愛着の程度を把握 ・国家試験に向けての学習計画立案実施評価、模試受験、補講受講の状況 ・実習指導者連絡会の開催と指導側及び学生からの評価 ・和歌山図書館入館者数、貸出数の利用状況 ・卒業生の自己研鑽としての環境整備と活用状況</p>	IV	<p>1. 初年次教育において、「アカデミック・スキル」「わかやま学」を設定し、さらに複数科目で高校から大学教育への円滑な意識の転換と能動的な学習方法を身につけ、専門教育における自主的・主体的な学習への移行を目指した取り組みを行った。主体的に学べるよう、シラバスにアクティブラーニングを明示し、全科目で学びの質を保つためにシラバスチェックをシステム化した。国試対策は1～3年生には、模試後の振り返り、学習の促進（国試Webの活用、各種業者の講座やサイト紹介、アプリの情報提供など）など主体的に国試に向かう取り組みを推進している。4年生には年間計画を立て目標シートを各自が作成し、国試委員・アドバイザーと学生の情報共有ツールとしてwebclassを活用して学生の主体的な取り組みを支援した。 ・非常勤講師（日赤和歌山医療センター医師）担当科目である「体の仕組みと働き」、「治療学総論」、「疾病治療論」の講義内容、試験問題内容等について、成果に応じて学生の主体的な学習の促進のために学部教員が支援を行い、教育目標の共有のために日赤和歌山医療センターとの合同教育会議を2回実施した。国試対策は1年次から系統的に主体的に取り組めるシステムとして実動している。</p> <p>2. 先輩学生の取り組みの成果を受けて、学生に「予習シート」、「目標設定シート」を配布し、主体的な学びが行えるように支援を実施した。国家試験への取り組みについて、医愛祭の企画として1期生を招き、具体的な内容や進め方の話を聞く機会を持った。低学年も含め参加学生が熱心に聞き質問をしていた。 ・学習支援した多くの科目の平均点が一定の水準に到達するなど取り組みの成果が見られた。学生自身が目標を設定し、アドバイザーと共有して学習を進めることができていた。国試対策では取り組みのイメージがついたと学生の反応であり、学習が進み、看護師および保健師国試とも不合格者は1名であった。 わかやま学の授業評価で「和歌山のすばらしさを知った」「和歌山に住んでいたが知らないことが知れた」など自由記述が多く、愛着形成に効果があった。アクションプランチームは今年度は科目内容を把握し、次年度からの活動を検討した。</p>	IV	<p>1. 大学での学び方を内容としたアカデミックスキル、これからのキャリアを考えていくためにキャリア教育Ⅰ～Ⅲ、それを支える情報に関する科目や論理的表現法も設置している。 2. 地域への関心を高める科目としてわかやま学（講義）とわかやま生活健康探索実習（実習）を設定している。 内容・実施状況、参加状況を以下の方法で得た。 ・わかやま学では、受講生がレスポンスカードを作成。 ・わかやま生活健康探索実習では、最終日のまとめの機会に、実習での学びを記載。 ・欠席者以外、9割以上が提出し、内容を質的に分析を行った。 ・わかやま学での発表会、和歌山生活健康探索実習での実習報告会にて、学生が得たことを表現できる機会となっていた。</p>				

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議		
	評価区分			評価区分					
<p>【計画16-2】 「ボランティア活動の体系化」、 「地域の看護教育ボランティアからの 学びの推進」及び「関連団体と連携し た社会的要請への対応」を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 地域へのボランティア活動の推進 と、地域住民の看護教育へのボラン ティア参加を進める。</p> <p>2. 赤十字活動を中心とした活動を活発 化する。</p> <p>【評価指標】 ・ボランティア活動状況、教育ボラン ティア参加状況</p> <p>【計画16-3】 異文化理解や語学力、コミュニケー ション能力を習得させ、豊かな教養の もとに多様な価値観に対応できる医療 人の育成を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 海外研修及び海外からの研修生の 受け入れ、近隣地域で生活する多国籍 の方との交流の機会をつくる。 2. 海外研修への参加案内と学生の参加 しやすい環境を整える。ベトナムの大 学との学生交流を進める。 3. 近隣地域で生活する、または保健医 療福祉施設で働く多国籍の人々との交 流の場をつくる。</p> <p>【評価指標】 ・海外研修参加学生数、ベトナムの大 学との学生交流の有無、多国籍の人々 との交流回数</p>	III	<p>1. ボランティア依頼は玄関ホールに掲示し、さらに学生に声をか けて募集を行った。活動届はWeb上で提出できるようにした。ボ ランティア活動のサポート体制として学生全員が和歌山市ボラン ティア保険に加入している。学生のボランティア活動に加え、地 域住民の看護教育への協力を得る看護教育ボランティアの説明会 にも学生ボランティアが参加した。</p> <p>2. 学生赤十字奉仕団を団員12名で発足し、活動を開始した。 ・ボランティア報告件数は延べ人数118名、活動団体数54種類で あった。選択科目「ボランティア論」74名、「ボランティア活 動」82名の学生で履修した。奉仕団発足と教育ボランティアの 集いについては大学ホームページに掲載している。本学学生が参 加している学生団体の活動もSNSで発信し、学会発表がなされ た。 奉仕団は和歌山県支部の活動への参加、主体的な活動として子 ども食堂イベント企画を実施した。その他、日赤和歌山医療セン ター大規模地震時医療活動訓練に12名が参加、社協祭りへの参加 など日赤関連、市関連団体への要請に応じている。</p>	IV	<p>1. ボランティア活動を体系化し試行的 に運用する。</p> <p>2. 赤十字活動参加学生と活動数を増加 させる。</p> <p>【評価指標】 ・ボランティア活動状況、教育ボラン ティア参加状況</p>	IV	<p>1. 2023年度ボランティア活動の報告件数は、延べ人数252名、活 動団体数は54種類であった（2024. 2月末地点）。 ・ボランティア論履修生は92名、ボランティア活動履修生は85名 であり、選択科目となっているものの、9割の学生が履修出来て いることから、学生の関心が高いことも伺える。 ・ボランティア活動届については、デスクネット回覧レポートを 通して記載提出できる体制を作り、ほとんどの学生がweb上で提 出できているため継続していく。 ・和歌山市ボランティア保険は大学として学生全員加入出来て おり、WILLへの加入に加え、安全なボランティア活動のためのサ ポート体制は取れている。 ・地域の看護教育ボランティアからの教育支援については、4つ の看護学領域が必要な内容とボランティアの参加を得て、教育を 実施している。年2回の教育ボランティア集いの会を催し、成果 の発表や意見交換を行っている。</p> <p>2. 学生赤十字奉仕団は、現在1年生19名、2年生7名、3年生5 名、4年生5名の計36名となっている。現在日本赤十字社和歌山県 支部主催の活動に参加したり、自分達で企画した学内演習、市民 図書館でのイベント企画と運営等、教員のサポートのもと活動で きている。医愛祭で献血バスでの学生の献血活動を実施した。 和歌山県学生献血推進協議会（以後、学推）には、これまで、 都合のあう人が随時活動に参加している状況であったが、今年、 本学は、学推の副委員長校となった。活動があれば、ボランティ アサークルメンバーと赤十字奉仕団メンバーに情報がいきわたる 仕組みを作っている。</p>			
		III	<p>1. サイネージやポスターだけでなく個別的に声掛けをし、積極的 に学生の研修参加へのアプローチを行った。 2. MOU締結後、COVID-19の影響により交流の機会を持つことができ なかった。 3. 外国人医療従事者との交流会を開催した。 ・オーストラリア研修1名、ハワイ研修に1名の参加があった。 2023年度にベトナムのナムディン大学との交流会の開催を行える ように準備を進める。外国人医療従事者3名と学部学生14名の対 面での交流ができた。</p>	III	<p>【年度計画16-3】 1. 海外研修参加数2名以上を維持す る。 2. ベトナムの大学との交流の機会を1 回以上つくる。 3. 地域で生活する多国籍の人々との交 流の機会を1回以上つくる。</p> <p>【評価指標】 ・海外研修参加学生数、ベトナムの大 学との学生交流の有無、多国籍の人々 との交流回数</p>	III	<p>1. 9月の本学主催の海外研修はリモート研修、3月の現地研修が開 催された。9月の研修には学生の参加はなかったが、3月のオース トラリア現現地修には学生4名の参加があった。 2. ベトナム ナムディン大学とのMOU締結後、交流会を持つため の交渉が進まず、交流会が開催できなかった。 3. 交流会には、和歌山市内の外国人医療従事者2名、本学部学生 5名と大学院生1名が参加し、対面で開催した。国際交流委員会と 連携を取りながら、参加者募集の広報を行い、会場の感染対策や 交流会の進行をサポートした。学生が直接、外国人との交流がで きる機会となるため、今後も継続していく。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画16-4】 ICTを駆使する能力を備え、保健医療福祉に貢献できる医療人を育成する。</p> <p>「計画達成のための方策」 ICTを活用した授業の実施と充実を図り、ICTによる主体的学習システムを構築し、学修成果の可視化を図る。</p> <p>【評価指標】 ・システムの利活用状況、新システムの利活用状況、学習過程・成果の可視化の程度</p>	III	<p>1. WebClass, ZOOM, Vsim, Medi-EYE, スマートグラス, Tobii3Pro, 電子黒板を導入し、学内で使用できるよう初期設定した。Medi-EYEやスマートグラスを用いた授業・演習設計についても報告し、ICTツールや、Nursing-skill, Nursing Channelについてマニュアルを作成して公開している。HSP受講について学部内で周知し募集を行った。</p> <p>2. ICTツールの使用状況とニーズ調査を行い、研修計画を立てた。WebClass, ZOOM の研修2回実施し、それぞれ35名が参加、90%以上が理解できたと回答した。レールダル社によるナーシングアンの勉強会を2回実施し、参加者延べ10名が参加した。Web class で修学カルテを用いた実習記録の運用についての研修は参加者36名、90%以上が理解できたと回答し、今後の導入はしたいと思うが20%、検討したい80%であった。可視化を進めるために、ICEルーブリックの学部内の勉強会を2回開催した。入門編20名、実践編10名程度の参加であった。</p> <p>3. 成人看護学領域がWebClassの修学カルテ機能を用いて実習記録の作成と管理を開始し、2月に実践報告会を行なった。</p> <p>・研修参加者は理解度が向上し、ZOOMについてはほとんどの領域で有効活用している。電子黒板は授業・演習での使用実績がなく今後有効活用を見出していく必要がある。複数科目でICEルーブリックが活用され始めたが12%にとどまっている。次年度には各領域で担当者を決めて推進していく。</p> <p>HSPについては4年生8名が修了し、ディプロマサプリメントを発行、1年生85名、2年生38名、3年生52名がコースを選択している。</p>	<p>【年度計画16-4】 1. これまでに導入したシステムの有効活用と評価を行う。 2. 新システム増設時の活用可能にするための研修を行う。 3. 学習過程・成果の可視化を試行的に開始する。 4. 各領域に1名のICT推進委員を置き、各種システムの活用を拡大する。 5. 学生のHSP取得を維持継続する。</p> <p>【評価指標】 ・システムの利活用状況、新システムの利活用状況、学習過程・成果の可視化の程度 ・学生のHSP取得状況</p>	IV	<p>1. 年間スケジュールを作成し、授業運営において必要性の高いICTツールや教材の使用法についての実践例を紹介できるよう、学習会を開催した。またICTツールや教材の使用に関するマニュアルを配信した。</p> <p>・WebClassによる体調管理の入力・管理方法、実習記録の使用法について勉強会を行なった。</p> <p>・学生への情報モラル教育について『情報倫理ガイドライン』動画を作成し、周知した。</p> <p>2. ・Web Class 修学カルテ（卒業時技術到達度、体調管理表、実習記録） ・Web Class ICEルーブリック ・Microsoft 365 Teams, F. CESSnurseを用いた演習および実習記録の活用</p> <p>3. ・修学カルテを全領域で活用できるように整え、卒業時技術到達度を全学年で統一して使用できるよう教員と学生に周知した。学生に対しては卒業時技術到達度を入力する意義などについても説明し、有効に活用できるよう指導した。演習記録、実習記録などを必要に応じて全領域が使用できるように設計した。</p> <p>4. ・ICT推進委員のスキルアップを目指して委員会内での学習会を実施した。</p> <p>・シミュレーションセンター設置に向けた取り組みについて、令和4年度に導入された映像機器を活用し、シミュレーション演習がスムーズに行えるよう、M101教室に配置した。実際に配置した機材を用いてオープンキャンパスで試験的に活用し実際の演習で使用できる状態であることを確認した。</p> <p>・さらに、「看護基礎教育におけるデジタル教育ツール活用の効果検証」のテーマで学長裁量費に採択され、備品の拡充を行った。</p> <p>5. 2020年度生57名、2021年度生50名にオープンバッチを付与した。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画		令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分		評価区分		評価区分			
<p>○大学院医療保健学研究科</p> <p>【計画17-1】 ㊦</p> <p>教育理念・教育目標に沿った教育プログラムを構築するとともに、人材を育成するため、本研究科のカリキュラムについての見直しを行う。</p> <p>「計画達成のための方策」</p> <p>1. 大学の教育理念に則った教育プログラムの確立。 2. 明確な教育目標の設定。 3. 教育目標に応じたカリキュラムの再構築。 4. 新しい教育制度の導入。 5. 主体的な学修を促す教育方法の導入。</p> <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい教育制度の導入状況 ・主体的な学修を促す教育方法の導入状況 ・大学院医療保健学研究科カリキュラム評価班会議：5回 <p>【計画17-2】 ㊦</p> <p>教育の質保証が実証できるマネジメントシステムを構築する。</p> <p>「計画達成のための方策」</p> <p>研究指導の質を保証するためのマネジメントシステムを構築する。</p> <p>1. FD活動による教育システムなどの開発。 2. 教育プログラムの実効性の確認。 3. 教員相互協力による教育能力向上。 4. マネジメントシステムの第三者評価。</p> <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FD活動による教育システムなどの開発状況 	III	<p>1-3. 各領域で3Pを設定し、それに基づいたカリキュラムを構築した。</p> <p>4. 教育制度の導入までに至らないが、教育方法としては、オンライン教育を充実させていった。</p> <p>5. 図書館データベースに自宅からアクセスが可能となり、自己学習の機会が充実し、主体的な学修の支援システムが整備された。また、大学院教務委員会が発足し、定例会議が開催され、教務関連について、大学院での検討が開始された。</p>	III	<p>【年度計画17-1】</p> <p>1. 大学の教育理念に則った教育プログラムの確立。 2. 明確な教育目標の設定。 3. 教育目標に応じたカリキュラムの再構築。 4. 新しい教育制度の導入。 5. 主体的な学修を促す教育方法の導入。</p> <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい教育制度の導入状況 ・主体的な学修を促す教育方法の導入状況 ・大学院医療保健学研究科カリキュラム評価班会議：5回 <p>【年度計画17-2】</p> <p>研究指導の質を保証するためのマネジメントシステムを構築する。</p> <p>1. FD活動による教育システムなどの開発。 2. 教育プログラムの実効性の確認。 3. 教員相互協力による教育能力向上。 4. マネジメントシステムの第三者評価。</p> <p>「評価指標」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FD活動による教育システムなどの開発状況 	III	<p>1-3. 各領域で3Pを設定し、それに基づいたカリキュラムを構築しそれに基づいた教育実践が実施されてきている。</p> <p>4. 教育制度の導入までに至らないが、教育方法は、オンライン教育でも対面と支障なく双方向での討議等を充実させている。</p> <p>5. 図書館データベースに自宅からアクセスが可能となり、自己学習の機会が充実し、主体的な学修の支援システムが整備された。また、大学院教務委員会が発足し、定例会議が開催され、教務関連について、大学院での検討が開始され、規定などの改定がなされている。</p>		
		III	<p>1-3. 学部と共同で、研究倫理、科研費獲得へのプロセスなどに関する講義・講演を実施し、またFD活動を通して、教員の教育・研究指導の能力を向上させるための支援を実施し、質の保証に努めた。</p> <p>4. 定期的に、大学及び大学院の教育に関する質保証のための外部評価委員会が開催され、評価を受けて改善に繋がっている。</p>	III	<p>1-3. 大学院独自に研究倫理、科研費獲得へのプロセスなどに関する講義・講演を実施し、またFD活動を通して教員の教育・研究指導の能力を向上させるための支援を実施し、質の保証に努めた。</p> <p>4. 定期的に、大学及び大学院の教育に関する質保証のための外部評価委員会が開催され、評価を受けて改善に繋がっている。</p>			

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>【計画17-3】 学際的・国際的な視点から自分の専門性を認識できる人材育成システムを整備する。</p> <p>「計画達成のための方策」 グローバル化に対応した人材を育成する。 1. 学際的・国際的な視点から自分の専門性の認識。 2. 学生のグローバル・リレーションシップ育成。 3. 実践的英語教育の導入。</p> <p>「評価指標」 ・実践的英語教育の導入状況 ・修士・博士課程論文の学会発表状況 ・海外論文発表経験者数 年間3名以上</p> <p>【計画17-4】 大学院医療保健学研究科修士課程プライマリケア看護学領域令和5年度に開講するための準備を進めるとともに、開講後適切に運営する。</p> <p>「計画達成のための方策」 大学院医療保健学研究科修士課程プライマリケア看護学領域令和5年度に開講するため、関係機関との調整等を着実に実施し、開講準備を着実に進めるとともに、開講後適切に運営する。</p> <p>「評価指標」 ・大学院修士課程プライマリケア看護学領域の開講準備・運営状況(令和7・8年度) ・入学者数、特定行為管理委員会開催数、修了生の人数、日本NP教育大学院協議会におけるNP資格認定試験合格者の人数、修了後の就業先と職務の状況、修了後の学会や研究会等の発表件数、在学生と修了生との交流及び研修会の開催状況</p>	II	<p>グローバル化に対応した人材を育成することとして、3. に関して立案した。学生自身が自分の専門性を認識し、2. 学生のグローバル・リレーションシップ育成するために、まず、3. の実践的英語教育の導入を図った。</p> <p>そこで、実践的英語教育の導入状況として、「学術コミュニケーション特論」を開設し、抄録を英文で作成する能力の獲得までを目指した。授業は実施できたが、全員が抄録作成できるまでには至らなかった。</p> <p>修士・博士課程論文の学会発表状況は、各領域の関連学会における学術集会で発表は実践できているが、論文投稿に至ったものは少数であった。</p> <p>全体論文報告会では、修了生は全員発表を実践できた。海外発表に至ったのは1名であった。引き続き、海外発表および論文投稿に繋がられるよう指導を行っていく。</p>	<p>【年度計画17-3】 グローバル化に対応した人材を育成する。 1. 学際的・国際的な視点から自分の専門性の認識。 2. 学生のグローバル・リレーションシップ育成。 3. 実践的英語教育の導入。</p> <p>「評価指標」 ・実践的英語教育の導入状況 ・修士・博士課程論文の学会発表状況 ・海外論文発表経験者数 年間3名以上</p>	III	<p>・グローバル化に対応した人材を育成することとして、3. に関して立案した。学生自身が自分の専門性を認識し、2. 学生のグローバル・リレーションシップ育成するために、まず、3. の実践的英語教育の導入を図り、abstractを英語で書けるとした。</p> <p>・実践的英語教育の導入状況は、「学術コミュニケーション特論」を開設し、抄録を英文で作成する能力の獲得までを目指し、授業は実施できたが、全員が抄録作成できるまでには至らなかった。</p> <p>・修士・博士課程論文の学会発表状況は、各領域の関連学会における学術集会で発表は実践できているが、論文投稿に至ったものは少数であるものの増加傾向にある。</p> <p>・全体論文報告会では、修了生は全員発表を実践できた。海外発表に至ったのは1名であった。引き続き、海外発表および論文投稿に繋がられるよう指導を行っていく。</p>				
	III	<p>・①から⑬について、計画通り全て完了した。</p> <p>・入学試験結果11名が合格した。準備状況においては、非常勤講師77名、実習施設の確保を完了し、現在は委嘱状の発行、教材作成を進めている。</p> <p>・⑦演習教室の確保、⑧シミュレータの検討については、令和5年前期に改修工事等を行いシミュレータの設置など教育環境の整備を継続する。</p> <p>・また、講師情報の変更に伴って、厚生労働省の変更申請を随時行っていく。</p>	<p>【年度計画17-4】 1. 大学院医療保健学研究科修士課程プライマリケア看護学領域を開講する。 ①4月開講 ②カリキュラムの進捗管理 ③科目試験の管理 ④入学合格者の実習病院決定と厚生局修正申請 ⑤放送大学（特定行為共通科目）学習の進捗および評価管理 ⑥オンライン科目の授業資料の作成(令和6年度分)管理 ⑦演習（OSCE）物品・シミュレータの搬入と管理 ⑧実習施設、実習指導医、実習指導NP（病院・施設・在宅）との打ち合わせ ⑨特定行為管理委員会開催 ⑩令和6年学生募集と入試</p> <p>「評価指標」 ・大学院修士課程プライマリケア看護学領域の運営状況</p>	IV	<p>・①から⑩について、計画通り全て完了した。</p> <p>・講義・演習では、学外講師77名（内訳：医師58名、看護師16名、その他専門家3名）学内講師8名の協力を得ることができ、計画通り、2023年4月に開講できた。</p> <p>・開講後は、カリキュラムの進捗管理、放送大学（特定行為共通科目）学習の進捗および評価管理、科目試験の管理により、設定期間内にすべての院生が履修合格ができた。</p> <p>・実習施設、実習指導医、実習指導NP（病院・施設・在宅）との打ち合わせを実施し、実習施設4施設、NP9名の協力を得ることができ、全員履修合格となった。また、令和6年に向けて実習病院14施設の確保ができ、厚生局修正申請を提出予定である。</p> <p>・演習室の確保と修繕を完了し、令和6年の授業に向けて演習（OSCE）物品・シミュレータの搬入を行う予定である。</p> <p>・特定行為管理委員会は2023年10月に第1回の会議を実施した。</p> <p>・令和6年度学生募集と入試により、計16名が入学した。</p> <p>・予定8名を超える入学生にともない、令和6年度に教員（診療看護師）1名を学部兼任担当として採用できた。</p>				

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画17-5】 ⑦ 独自の公開講座の開催など、学生の研究発表や研鑽の場を企画して提供していくとともに、科学的研究費などへの申請数及び採択率の向上を目指す。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 公開講座の開催。 2. 競争的資金の獲得に向けて研究テーマを抽出する。 3. 複数の領域が協力して、研究計画と応募書類を作成する。 4. 審査結果の開示以降に、不採択理由の検証を行う。また、不備の認められる点について検討し、次年度申請の採択率の向上を目指す。</p> <p>「評価指標」 ・ 公開講座の開催年1回 ・ 科研費獲得に向けた取組状況</p> <p>【計画17-6】 ⑦ コンセプトに基づく計画の立案と具体化を図り、国際感覚にあふれたキャンパスを実現する。</p> <p>「計画達成のための方策」 キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。知的創造のための拠点となるグローバル化に対応する施設環境を実現する。</p> <p>「評価指標」 ・ キャンパス教育環境向上プロジェクトの推進状況</p> <p>【計画17-7】 ⑦ 学生が誇りを持てる学修環境を実現する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 時代に見合った学部学科構築のための検討・実施。 2. 充実した学生生活支援。 3. 一般入試方式重視による入学生の質的向上</p> <p>「評価指標」 ・ 学修環境の整備状況</p>	III	<p>1. 各領域から代表が集まり、その年のテーマを決めて公開講座を開催した。また公開講座のプログラムの中で、修了生の研究発表が実施できた。 2-4. 教員及び大学院生による科研費の申請は試みているが、採択には至らなかった。査読結果に関しては、指導教員が共に指摘内容を確認し、計画修正に繋げている。</p>	III	<p>1. 各領域から代表が集まり、その年のテーマを決めて公開講座を開催した。また公開講座のプログラムの中で、修了生の研究発表が実施できた。 2-4. 教員及び大学院生による科研費の申請は試みているが、採択には至らなかった。査読結果に関しては、指導教員が共に指摘内容を確認し、計画修正に繋げている。</p>	III		
	II	<p>・ キャンパス教育環境向上プロジェクトについては、施設環境の充実が図れていない。次年度は、新設領域が開設されることから、使用教室の調整や、キャンパス内の清掃・衛生管理を徹底し、システムを整備していくこととする。</p>	II	<p>・ キャンパス教育環境向上プロジェクトについては、施設環境の充実が図れていない。次年度は、新設領域が開設されることから、使用教室の調整や、キャンパス内の清掃・衛生管理を徹底し、システムを整備していくこととする。</p>	II		
	III	<p>1. オンライン上でのICT教育を整備し充実させた。 2. 入学生全員へのPC貸与により、学生の学習環境の確保ができた。 3. 大学院会議において、特に博士課程の入学者に関しては、研究遂行の能力の査定が必要であることが確認された。また、本審査の前段階として予備審査を設けるなど、段階的に審査を実施することの検討も行っていく。</p>	III	<p>1. 時代に見合った学部学科構築のための検討・実施。 2. 充実した学生生活支援。 3. 一般入試方式重視による入学生の質的向上</p> <p>「評価指標」 ・ 学修環境の整備状況</p>	IV		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画17-8】 産学協同体制の構築によるブランド力向上プロジェクトの推進を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。</p> <p>1. 卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。 2. 産学協同研究成果の対外的なPR促進。 3. 地域社会との連携によるPR促進。 4. 特別教授制度による先端研究導入。</p> <p>「評価指標」 ・ブランド力向上プロジェクトの推進状況</p> <p>○大学院看護学研究科 【計画18】 大学院修士課程における課題研究及び特別研究の成果について、修了後1年以内に口頭発表を行うとともに、誌上発表を行い、発表数を増加させる。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 研究倫理審査レベルの向上。 2. 迅速な審査と結果の伝達。</p> <p>「評価指標」 ・小委員会委員全員の倫理審査委員向けの研修の受講状況 ・審査日後2日以内の申請者への結果伝達。</p>	III	<p>産学協同体制の構築によるブランド力向上を図るために、計画1-4を立案した。</p> <p>1. 卒業生との交流活性化によるPR効果の促進では、大学院公開講座を開催し、学びの交流を図った。 2と4では、産学協同研究成果の対外的なPR促進では、企業との産学連携のもと、特別教授制度による先端研究を実施している講師を招聘しての研究会などを開催した。 3. 地域社会との連携によるPR促進では、市区町村や企業との連携をすることによって産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。学内の総合研究所や産後ケア研究センターなど、産官学連携による事業も展開、開始され、PR促進に繋がっている。</p>	III	<p>産学協同体制の構築によるブランド力向上を図るために、計画1-4を立案した。</p> <p>1. 卒業生との交流活性化によるPR効果の促進では、大学院公開講座を開催し、学びの交流を図った。 2と4では、産学協同研究成果の対外的なPR促進では、企業との産学連携のもと、特別教授制度による先端研究を実施している講師を招聘しての研究会などを開催した。 3. 地域社会との連携によるPR促進では、市区町村や企業との連携をすることによって産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。学内の総合研究所や産後ケア研究センターなど、産官学連携による事業も展開、開始され、PR促進に繋がっている。</p>			
	IV	<p>1.2. 研究発表会並びに大学院教授会を通して大学院生と指導教員への啓発を行い令和3年度修士課程修了者30名中14名（47%）が1年以内に学会発表を行ない、4編の誌上発表が行われた。 ・倫理審査委員向けの受講者は2名増加し、受講終了者は委員7名中4名となった。 ・審査日後の結果伝達は平均0.7日（0～2日）であり、迅速に結果をまとめた上で報告できた。</p>	IV	<p>1. 研究倫理審査レベルの向上。 2. 迅速な審査と結果の伝達。</p> <p>「評価指標」 ・小委員会委員全員の倫理審査委員向けの研修の受講2名 ・審査日後2日以内の申請者への結果伝達。</p>	<p>1. 研究発表会・大学院教授会により大学院学生と教員への啓発を行い、令和5年度には修士課程修了生35名中3名（9%）が学会発表を行い、3編の誌上発表が行われた。（2/28集計中） ・倫理審査委員向け研修の受講者2名。委員の交替もあったが、受講修了者は委員7名中5名となった。 ・審査後の結果伝達は平均0.2日であり、迅速に結果を報告できた。 2. NPフォーラム2023を2023年12月2～3日で開催した。のべ参加者数は在学生含め136名であった。修了生によって実践報告で1題、シンポジウムで6題の活動報告があった。また修了生実態調査報告では、対象となった修了生のうち、課題研究の学会への発表は約6割（54人）、学会誌等への掲載が約2割（21人）が実施していたことが明らかになった旨報告された。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画		令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分		評価区分		評価区分			
<p>○大学院千葉看護学研究科 【計画19-1】 研究科修士課程においては、各指導教員の役割分担と連携体制を明確にして指導教員間の綿密な協議に基づき、DPを実現する体系的な大学院教育を行うこととし、院生の質を保証する組織的な教育・研究指導体制の充実を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 地域交流イベントにおける活動の実施。 千葉看護学部の地域交流イベントにおいて、院生を主体とする企画を実施し、主として西船橋地区住民のニーズに応える保健医療の連携に貢献する。 「評価指標」 ・地域交流イベントでの企画数、参加住民等からのアンケート結果、参加学生からのアンケート結果</p> <p>2. 修了生の研究発表支援の実施。 修了生の研究成果の公開を支援し、実装的研究実施支援の在り方を検討する。 「評価指標」 ・修士論文の学会等での発表及び学会誌等へのアクセプト数、及び内容、自己/第三者評価結果</p> <p>3. 教育活動と成果の点検評価及び改善活動の推進。 学生からの授業評価並びにそれに対する教員の自己評価、各会議での検討等に基づき、大学院DPに照らした点検評価を行い、CP、AP及びDPの改定に向けた準備を行う。 「評価指標」 ・検討会の開催回数、成果物としての新カリキュラムの有無と内容</p>	III	<p>1. 交流イベントにおいて学生を主体とする発表を行った：1回 ・本発表を実践報告として次年度（令和5年度）紀要ならびにJCHO学会に発表予定である。</p> <p>2. 毎月行う研究指導教員で行う研究科運営会議において、特別研究の進捗状況について共有し、外部審査担当を置いた特別研究の審査体制を明文化し、初の修士課程修了生5名を輩出することができた。合わせて、終了後の学会発表・論文公表への支援を継続するための研究生制度も導入し、修了生5名のうち4名がエントリーした。また、学内外の関係者に公開する発表会を開催した。研究科教員、学部教員ほか、病院の看護部長の参加も得ることができた。 ・研究科学生により、地域交流イベントで、研究科の学修成果を発表した。DPに照らした評価は研究科運営会議では行ったが、研究科教授会では未実施である。</p> <p>3. 令和3年度の学生からの授業評価アンケート結果を、8月に各科目で検討し、後期の教育活動ならびに令和5年度授業改善に活用した。令和4年度前期・後期開講科目については、今年度の履修者や修了生の状況を資料として、各科目ならびに研究科運営会議で改善点の検討を行った。特に、1年次後期必修科目の「看護機能推進演習」については、点検評価会議を開催し、1年次前期必修科目の「看護機能推進特論」や「特別研究」その他の科目との関連を含め、入学者のレディネスを考慮し、DPの達成に向けて効果的に運営する方策について意見交換し、議事録として改善計画報告書を作成した。また、和歌山看護学研究科と合同で「修士論文作成における学びの過程と指導・支援のポイント」という合同学習会を行い、入学者のレディネスに合わせた指導について検討した。</p>	III	<p>【年度計画19-1】 1. 地域交流イベントにおける活動の実施。 ①前年の情報をもとにテーマをしぼって情報収集を行う。 ②成果を活動報告として紀要等に一つ以上発表する。 「評価指標」 地域交流イベントでの企画数（1つ以上）、参加住民等からの肯定的な意見、参加学生からの肯定的な意見、活動報告公開数（1つ以上）</p> <p>2. 修了生の研究発表支援の実施。 修了生を支援し学会・誌上発表を行う。 地域交流イベント等において発表の企画を設ける。 前年度計画記載の修了生の状況を加えた検討会を開催する。 「評価指標」 ・研究科学生による地域交流イベント等での研究報告の有無、修士研究内容に関する審査及び研究科教授会でのDPに照らした評価結果 ・修士論文の学会等での発表及び学会誌等へのアクセプト数</p> <p>3. 教育活動と成果の点検評価及び改善活動の推進。 「評価指標」 ・検討会の開催回数（年2回）、成果物としての点検評価・改善計画報告書とその内容</p>	III	<p>1. 前年度の成果について、一部をJCHO学会において発表した。3月24日に開催された地域交流イベントにおいて、研究科学生による演習成果発表会を行った。令和6年度は、それまでの活動を令和7年度紀要に発表することをめざして成果の整理を行うとともに、今後の成果発表の焦点化について検討することが課題である。</p> <p>2. 令和4年度修了生5名中4名が学会発表し、1名は令和6年度5月の学会発表が確定している。 ・令和5年度地域交流イベントでは、「地域看護機能推進演習（必修）」履修者により、演習での成果物をもとに発表をおこない、参加者との意見交換を行った。当日は、上智大学地域看護学教授を招聘し、意見交換及び助言を得ることで、今後の課題についてフィードバックがなされた。 ・令和4年度修了生の授業評価アンケート結果に基づき、令和5年度の授業改善につなげた。定期研究科運営会議にて、特別研究の進捗、令和5年度学位（修士）申請者の論文審査の評価基準をもとに各学生の取り組み状況を共有し検討した。</p> <p>3. 令和4年度の学生からの授業評価アンケート結果に基づき、令和5年度の授業改善につなげた。各科目の検討会議および研究科運営会議において、到達目標の達成状況や他科目との関連性からの学習効果を検討した。科目と各DPとの関係については、次年度以降さらに整理を行う必要性を教務委員会で確認した。以上の記録は、各議事録に残した。 ・令和5年度は特別研究担当教員1名を加えるとともに、各学生の研究テーマに応じて、大学院担当教員のなかから副指導教員を選出し、指導体制の充実を図った。</p>		

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>【計画19-2】 ⑦ 修了生の研究成果の公開を支援し、実装的研究実施支援の在り方を検討する。</p> <p>「計画達成のための方策」 研究科DPにのっとり、保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化をめざした修了生の研究成果の公開を支援し、実装的研究実施支援の在り方を検討する。</p> <p>「評価指標」 ・学生の授業評価アンケートによる授業の質評価、修了生の研究成果の公開数、地域連携の推進や看護機能の明確化に関する情報交換会等の開催数</p> <p>【計画19-3】 ⑦ 優秀な学生を確保する。</p> <p>「計画達成のための方策」 基盤となる人材の獲得をめざし、入試・広報活動等を通して、保健医療組織及び個人に本学及び本研究科のビジョンを伝え、これに共鳴する受験生の獲得を図る。また、保健医療の現場に直接貢献しようとする人材を育成するため、修了後の臨床現場での活躍イメージをもって学修・研究が実施できるよう学生支援を行う。</p> <p>「評価指標」 ・学生の授業評価アンケートによる大学・研究科ビジョンへのコミットメント状況、科目選択や研究テーマ設定における修了後の就業イメージとの一致状況、修了後に保健医療現場へ就職・復帰する修了生数、修了生の現場での活動状況</p>	IV	<p>・「特別研究」は、初開講であるため、授業評価アンケート結果はまだ届いていないが、研究指導教員で毎月開催する研究科運営会議の場を中心に、特別研究の進捗状況を共有し、学会発表や学会誌投稿を視野にいれた支援の在り方を検討した。</p>	<p>【年度計画19-2】 修了生を支援し学会・誌上発表を行う。地域交流イベント等において発表の企画を設ける。前年を継続するとともに、修了生の状況を加えた検討会を開催する。</p> <p>「評価指標」 ・学生の授業評価アンケートによる授業の質評価、修了生の研究成果の公開数、地域連携の推進や看護機能の明確化に関する情報交換会等の開催数</p> <p>【年度計画19-3】 前年に準じた活動を行う。加えて、授業評価アンケートを分析し、評価改善を行う。修了生の現場での活動状況を把握するための手段（アンケート、修了後に参集できる機会の設定、等）を検討する。</p> <p>「評価指標」 ・学生の授業評価アンケートによる大学・研究科ビジョンへのコミットメント状況、科目選択や研究テーマ設定における修了後の就業イメージとの一致状況、修了後に保健医療現場へ就職・復帰する修了生数、修了生の現場での活動状況</p>	IV	<p>・令和4年度修了生5名のうち4名が研究生となり、担当教員の指導のもと学会発表、論文の投稿準備を進めた。研究生ではない者も含め、5名中4名が学会発表を終え、1名は令和6年5月学会発表が確定している。</p> <p>・令和5年度地域交流イベントでは、「地域看護機能推進演習（必修）」履修者により、演習での成果物をもとに発表をおこない、参加者との意見交換を行った。当日は、上智大学地域看護学教授を招聘し、意見交換及び助言を得ることで、今後の課題についてフィードバックがなされた</p> <p>・令和4年度修了生の授業評価アンケート結果に基づき、令和5年度の授業改善につなげた。定期研究科運営会議にて、特別研究の進捗、令和5年度学位（修士）申請者の論文審査の評価基準をもとに各学生の取り組み状況を共有し検討した。</p> <p>・千葉県内の施設470箇所ならびに、JCHO病院・看護学校60箇所に募集ポスター配布を2回行った上で、入試説明会を2回開催した。また、学部の実習施設となっているJCHO病院に訪問し、パンフレットの配架依頼等の広報活動を実施した。</p> <p>・学生へ授業評価アンケートの分析は科目担当者間のみの実施であり、全体での把握はしていなが、DPと照合しての自己評価や、研究テーマ設定から、本学研究科で目指す地域医療の場で看護機能を推進する人材像と一致している。</p> <p>・就学中に離職していた学生も修了後は就職し、全員保健医療現場（教育含む）で活動していく。</p>				

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議	
	評価区分			評価区分				
<p>【計画19-4】 仕事を待つ学生への修学支援等を行う。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 学生が仕事を継続しながら学修できるような時間割を工夫するとともに遠隔授業とそのサポートの仕組みを整備する。</p> <p>2. 科目等履修制度の整備・活用を推進する。</p> <p>3. 地域交流イベントやWEB掲載等により研究科主催の公開授業を実施する。</p> <p>「評価指標」 ・学生の授業評価アンケートによる出席のしやすさ・サポート評価、仕事を継続しながらの入学生数、欠席・休学状況、科目等履修制度利用者数、研究科主催の公開授業実施数</p> <p>【計画19-5】 地域連携に関する共同研究を実施する。</p> <p>「計画達成のための方策」 保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化に関する独自の講義・演習を開発・展開し、これを基盤とした修士研究の指導、及び共同研究を行う。</p> <p>「評価指標」 ・研究科内での教員によるピアレビュー数と評価、修士論文に対する学内外の評価、保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化に関する共同研究の数</p>	IV	<p>1. 令和3年度および4年度の授業実施・出席状況ならびに、学修成果について、研究科運営会議にて検討した。その結果を受け、選択必修科目の時間割上表裏を最小にしたり、履修希望者の多い隔年開講科目を毎年開講としたり、複数科目について、研究デザイン検討と連動するような開講時期に変更するなどの改善を行って、令和5年度時間割を作成した。令和4年度の入学者は11名全員が社会人であり、令和5年度の入学者10名もすべて社会人となっている。</p> <p>2. 科目等履修制度について、入試説明会だけでなく、個別相談でも周知し、ホームページ上でも募集案内を行い、令和4年度2名、令和5年度1名の科目等履修生の利用があった。</p> <p>3. 地域交流イベントで、研究科主催の公開授業は行わなかったが、大学院学生による学修成果報告を行った。</p>	IV	<p>【年度計画19-4】 前年度に準ずる。研究科授業の教材をWEB公開する（1コマ分）</p> <p>「評価指標」 ・学生の授業評価アンケートによる出席のしやすさ・サポート評価、仕事を継続しながらの入学生数、欠席・休学状況、科目等履修制度利用者数、研究科主催の公開授業実施数</p> <p>【年度計画19-5】 地域連携に関する共同研究を開始する（1つ）。</p> <p>「評価指標」 ・研究科内での教員によるピアレビュー数と評価、修士論文に対する学内外の評価、保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化に関する共同研究の数</p>	IV	<p>1. 令和5年度入学生10名が仕事を継続しながら学業を継続できるよう、業務で欠席せざるを得ない授業については終了後にオンデマンド配信を行った。特別研究のゼミに関しても、学生の勤務に応じて柔軟にスケジュール調整を行い、研究計画を進められるよう支援した。</p> <p>2. 科目等履修制度について、入試説明会、個別相談、ホームページ上で募集案内を行い、令和5年度1名の利用者は、令和6年度入学予定となった。令和6年度も1名の科目等履修生の利用予定であり、該当者には、大学院出願に向けた準備とあわせて、効果的な履修計画となるよう個別相談を行った。科目等履修生選考の実施要項を作成し、本制度の運用を円滑にする体制を整えた。</p> <p>3. 学生の授業評価アンケートから、出席のしやすさ、履修支援に関して否定的な意見は認められなかった。令和5年度は入学生10名中9名が前から従事する仕事を継続していた。残り1名も学内で非常勤助手として働きながら学修に取り組んだ。前年度休学していた学生1名は後期から復学したが、研究より非常勤業務の優先を希望し、退学した。科目等履修生は1名であった。研究科主催の公開授業は行わなかったが、地域交流イベントで大学院生10名が看護機能推進演習における学習成果を発表した。</p> <p>・次年度は、公開授業について、募集につながる模擬授業をWeb公開することを検討する。</p> <p>・開設初年度（令和3年度）より、保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化に関する講義・演習として、看護機能推進特論および演習を実施し、3回目となる本年度に学生の授業評価や卒業時点での達成状況に基づいた評価を科目担当教員全員で行い、内容と方法に改善を加えた。次年度についてはこれまでCOVID-19感染のため実施できなかったフィールドワークを取り入れ、これにより周辺地域への貢献につなげることを検討する。加えて、修士生の研究公開状況を確認する。</p> <p>・共同研究は実施しておらず、次年度には実践報告として本学紀要に投稿すること、および修士生との研究の可能性を探索する。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画		令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分		評価区分		評価区分			
<p>○大学院和歌山看護学研究所 【計画20-1】㊦</p> <p>教職員体制の充実のもと、DPを実現するための教育方法を開発し学生の学びの質を保证する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 社会人学生の学びを推進する教育方法を開発する。</p> <p>「評価指標」 ・教育方法と教育体制の検討・開発状況、大学院担当教員数 ・遠隔地でも学べる学習環境の整備状況</p> <p>2. 修了生の研究成果の公表を支援する。 「評価指標」 ・学会等での発表および学会誌等への投稿数及び内容の状況</p> <p>【計画20-2】㊦ 学生の社会生活と学習を両立できる環境整備を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 各種奨学金、補助金等に関する情報収集と獲得及び学生への周知を行うとともに、学生の学べる時間に応じた学習方法の検討を行い、科目履修での学びを勧める。 「評価指標」 ・各種奨学金、補助金の獲得状況 ・学生の学べる時間に応じた学習方法の開発状況（e-ラーニングなど） ・科目履修生制度の利用状況</p>	III	<p>1. 准教授、講師を特論、演習科目に配置し、修士論文審査では新たに准教授を中心に副査として配置し、充実を図った。社会人学生であるため、学びの準備のために入学前教育を実施した。また学びを推進する教育方法を検討するため、修了生、在学生、教員を対象に「教学調査」を実施した。学習環境については8割が満足という結果であった。自由記載から、ICTスキルの向上とそれらが学修成果に繋がるように、Desknet'sやWebClassといった学修支援アプリケーションを説明する機会を設けた。対面、オンライン、ハイブリッドに対応できる受講環境の整備し、遠隔地からも学べる環境が整った、大学院生室の環境整備を行った。 ・大学院担当教員数は、開設当初の教授7名、准教授2名、講師3名から、今年度は教授8名、准教授9名、講師5名となった。新規教員の多い体制であったために教育方法検討については、次年度の課題として引き続き検討したい。</p> <p>2. 修了生に学会発表と学会誌への投稿について継続して指導することを伝え、指導教授は支援した。学生の連絡先の登録ができたため、支援体制の構築に向けては次年度に検討する。 ・令和3年度修了生10名中、学会発表は今年の発表予定を含め6名、投稿は紀要に1名、学会誌に2名行い、1名は学会誌に原著で受理された。</p>	IV	<p>【年度計画20-1】 1. 大学院担当教員の充実 ①社会人学生の学びを推進する教育方法を検討する。 ②遠隔地でも学びを可能にする教育方法、教育体制を検討する。 ③入学前教育により大学院での学びへの適応を図る。 「評価指標」 ・教育方法と教育体制の検討・開発状況、大学院担当教員数</p> <p>2. 修了生の研究成果の学会への発表とその後の投稿を支援する。 「評価指標」 ・学会等での発表および学会誌等への投稿数及び内容の状況</p>	IV	<p>1. 令和4年度に引き続き、充実した担当教員により、修士論文審査を実施することができた。 ・ハイブリッドによる受講環境の下、学生は仕事の状況に応じてタイムリーにオンラインか対面を選択して講義や演習への出席が可能になった。学生の学修ニーズの確認し、必要な文献検索、分析方法など個別に対応した。研究室の整備により、研究室がよく活用され、学生同士のディスカッションが活発に行われるようになった。今年度は7名中6名が2年で終了、1名が休学を含め3年で修了した。入学前教育はプレセミナーとして、大学院で学ぶことについて説明し、在学生から学び方や生活について具体的に聞く機会を設けている。 ・大学院担当教員数は、教授8名、准教授9名、講師4名の体制であった。</p> <p>2. 修了生への学会発表および論文投稿に向けた指導を継続して行っている。次年度からは個別指導を継続するとともに研究生制度をスタートし、キャンパスの学習環境も整えた。 ・修了生の成果として、学会誌への原著：2、紀要への研究報告：1、学会発表が9（内1名優秀演題賞）、院内報告が2であり、今後に向けて学会誌への投稿中、次年度学会発表にエントリーしている。</p>	III	<p>【年度計画20-2】 1. 各種奨学金、補助金等に関する情報収集と獲得及び学生への周知を行う。 2. 学生の学べる時間に応じた学習方法の検討を行う（e-ラーニングなど） 3. 科目履修での学びを勧める。 「評価指標」 ・各種奨学金・補助金の獲得状況 ・学生の学べる時間に応じた学習方法の開発状況（e-ラーニングなど） ・科目履修生制度の利用状況</p> <p>1. 教育訓練給付制度（専門実践教育訓練給付）の指定を受けているため、申請手続きについて説明し、6名の学生が活用し学費の負担軽減がされている。 2. ハイブリッド型の授業を行っているが、自分の都合の良い時間に学べるe-ラーニング等の検討をしていく。 3. 科目履修生は2名。</p>

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>【計画20-3】 ⑦ 修了生の学修継続支援を行う。</p> <p>「計画達成のための方策」 修了生の研究成果発表の機会を確保するなどにより、修了生の学修継続支援を行う。</p> <p>「評価指標」 ・修了生の学習支援機会の確保数 ・研究成果の発表と投稿数</p> <p>○助産学専攻科 【計画21-1】 ⑦ 教育理念・教育目標に沿った教育プログラムを構築する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 教育理念に則った教育プログラムの確立。 1) 明確な教育目標の設定。 2) 教育目標に応じたカリキュラムの再構築 2. 新しい教育制度の導入 1) 主体的な学修を促す教育方法の導入 2) ルーブリック評価法などを活用し、学生へもわかりやすい評価の提示 3) CBT・OSCEの実施 4) 裂傷縫合・経腹エコーの技術の獲得</p> <p>「評価指標」 ・新しい教育制度の導入状況 ・主体的な学修を促す教育方法の導入状況</p> <p>【計画21-2】 ⑦ 産後ケアセンターでの実習を通し、地域の母子を支援する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. アーリー・エクスポージャーの一環として、産後ケア研究センターなど、現場で働く助産師活動に触れる。 2. 地域や海外で助産師活動に従事する講師の招致。 3. NCPR、受胎調節実地指導員講習会の開催。 4. 1人あたり10例程度確実に分娩介助実習を行い、臨床経験の確保。 5. 新カリキュラムの検討。 6. 地域に貢献できるように、妊産婦・乳幼児健診の実習の機会を増やす。 7. 生活の場における地域での母子支援の在り方について考えていける。</p> <p>「評価指標」 ・実習の受入れ状況</p>	II	<p>・修了生の研究成果発表の機会の確保については、修士論文指導教員が主として個別に行っている現状である。 ・修了生の動向を把握し、学習支援機会について検討を始めたところである。教務委員会が推進するシステムを構築する予定である。 研究成果としては、修了生1名が日本看護協会認定看護管理者に合格した。研究成果の発表と投稿数は【年度計画20-1】の評価で示した。</p>	<p>【年度計画20-3】 修了生の研究成果発表の機会を確保するなどにより、修了生の学修継続支援を行う。</p> <p>「評価指標」 ・修了生の学習支援機会の開催数 ・研究成果の発表と投稿数</p>	III	<p>・本研究科修了生に対して研究生制度を次年度から開始する予定で2名が応募した。研究生の学習環境として文献検索できるパソコンの設置も行った。</p>				
	III	<p>1. 母子保健法の改正により、助産師は生後1年までの母子の支援が求められるため、カリキュラム変更を行い「乳幼児の発育・発達とケア」を新規科目として立ち上げた。本科目では、新生児科医師の講義も多く配置し、健診時の診断能力の向上も目指している。 2. CBTやOSCEが今後、国家試験での新規取り組みとして導入が見込まれるため、全国助産師教育協議会での取り組みにも参加し、次年度以降実施していくための準備を行った。ただし、OSCEの実施にあたっては、学生1名あたりに多大な時間を要するため、実施方法に関して検討が必要である。 裂傷縫合演習は今年度も実施した。経腹エコーは機器の購入が図られた。次年度以降演習内に取り入れていく。</p>	<p>【年度計画21-1】 1. 教育理念に則った教育プログラムの確立。 1) 明確な教育目標の設定。 2) 教育目標に応じたカリキュラムの再構築 2. 新しい教育制度の導入 1) 主体的な学修を促す教育方法の導入 2) ルーブリック評価法などを活用し、学生へもわかりやすい評価の提示 3) CBT・OSCEの実施 4) 裂傷縫合・経腹エコーの技術の獲得</p> <p>「評価指標」 ・新しい教育制度の導入状況 ・主体的な学修を促す教育方法の導入状況</p>	III	<p>1. 母子保健法の改正により、助産師は生後1年までの母子の支援が求められるため、カリキュラム変更を行い「乳幼児の発育・発達とケア」を新規科目として立ち上げた。本科目では、新生児科医師の講義も多く配置し、健診時の診断能力の向上も目指している。 2. CBTやOSCEが今後、国家試験での新規取り組みとして導入が見込まれるため、全国助産師教育協議会での取り組みにも参加し、プログラム作成に携わった。今後、1年課程への導入方法に関して検討していく。 裂傷縫合演習は今年度も実施した。経腹エコーは機器の購入が図られた。次年度以降演習内に取り入れていく。</p>				
	III	<p>1、6、7. 産後ケア研究センターが、地域で生活している母子の支援に触れることができ、助産学専攻科の実習施設として成立してきている。 また、オンライン育児クラスの開催によって、コロナ禍における地域の母子の実際や支援ニーズを学ぶ機会となった。 2. 地域母子保健学の講義内で、地域や海外で活躍する医療職の話聞き、異なる文化圏における学習の機会を設けた。 3. 各講習会を受講し実践演習を行った後、試験に合格して資格認定を受けた。 4. コロナ禍により、実習受け入れ人数や受け入れ期間の減少などがあるが、学内実習での補充も含め、10例程度の分娩介助を確保できた。 5. 母子保健法の改正により、産後ケアの対象は産後1年までの母子となったことから、「助産診断・技術学」や新設した「乳幼児の発育・発達とケア」において、1年までの母子を診る力の向上に努めている。</p>	<p>【年度計画21-2】 COVID-19禍でオンライン育児クラスの開始。</p> <p>「評価指標」 ・実習の受入れ状況</p>	III	<p>・産後ケア研究センターにおいて、地域で生活している母子の現状と実際の支援に触れることができ、助産学専攻科生全員の実習施設として成立している。 ・母子支援クラスの開催によって、地域の母子の実際や支援ニーズを学ぶ機会となった。 ・地域母子保健学の講義内で、地域や海外で活躍する医療職の話聞き、異なる文化圏における学習の機会を設けた。 ・各講習会を受講し実践演習を行った後、試験に合格して資格認定を受けた。 ・実習受け入れ人数や受け入れ期間の減少などがあるが、学内実習での補充も含め、10例程度の分娩介助を確保できた。 ・母子保健法の改正により、産後ケアの対象は産後1年までの母子となったことから、「助産診断・技術学」や新設した「乳幼児の発育・発達とケア」において、1年までの母子を診る力の向上に努めている。</p>				

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>【計画21-3】 ⑦ 大学と臨床施設との連携を図り、大学大学院までのキャリアを見据えた教育を実施する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. NCPR講習会や受胎調節実地指導員講習会の開催。 2. 産後ケア研究センターの従事者研修会への参加。 3. 東京母性衛生学会学術セミナーの参加。 4. チーム医療推進助産師研修会への参加。 5. 実習協議会の開催。</p> <p>「評価指標」 ・実習施設への就職率</p>	III	<p>1、2. 産後ケア研究センターの従事者研修会やNCPR講習会など、実習施設にも公開し、臨床スタッフの参加も促している。 3. 本学で開催した東京母性衛生学会学術セミナーに、実習施設の助産師の参加が多数あった。 4. オンラインで実習協議会を開催し、今年度の実習指導の振り返りや次年度に向けての検討を行った。今年の卒業生の実習施設への就職率は40%程度に増加した。</p>	<p>【年度計画21-3】 1. NCPR講習会や受胎調節実地指導員講習会の開催。 2. 産後ケア研究センターの従事者研修会への参加。 3. 東京母性衛生学会学術セミナーの参加。 4. チーム医療推進助産師研修会への参加。 5. 実習協議会の開催。</p> <p>「評価指標」 ・実習施設への就職率</p>	III	<p>1. 2. 産後ケア研究センターの従事者研修会やNCPR講習会など、実習施設にも公開し、臨床スタッフの参加も促している。 4. 5. オンラインで実習協議会を開催し、今年度の実習指導の振り返りや次年度に向けての検討を行った。今年の卒業生の実習施設への就職率は40%程度であった。</p>				
<p>【計画21-4】 ⑦ 研究レベル向上の為の大学教育プログラムを確立する。</p> <p>「計画達成のための方策」 研究レベルに裏付けられた大学での人材育成を図る。 1. 体系的なカリキュラムの構築。 2. 学部・大学院の一貫教育の導入。 3. 国際会議発表の推進。 4. 産学連携・地域連携による共同研究の推進。</p> <p>「評価指標」 ・研究レベル向上の為の大学教育プログラムの作成状況</p>	II	<p>・研究レベル向上の為の大学教育プログラムを確立するために、研究レベルに裏付けられた大学での人材育成を図る計画1-4を立案した。 1. 体系的なカリキュラムの構築として、共通科目から個別の専門科目、そして修士・博士論文作成の研究に至るまでを段階的に学べるように、研究特論など基礎的科目も充実させた。 2)に関しては、進行はできなかった。 4の産学連携・地域連携による共同研究の推進を図ることで、計画3の国際会議発表の推進に導けるよう取り組んでいる。 取り組みの中で、研究レベル向上の為の大学教育プログラムの作成を図るために、研究のスケジュールリングを指導している状況である。</p>	<p>【年度計画21-4】 研究レベルに裏付けられた大学での人材育成を図る。 1. 体系的なカリキュラムの構築。 2. 学部・大学院の一貫教育の導入。 3. 国際会議発表の推進。 4. 産学連携・地域連携による共同研究の推進。</p> <p>「評価指標」 ・研究レベル向上の為の大学教育プログラムの作成状況</p>	III	<p>・研究レベル向上の為の大学教育プログラムを確立するために、研究レベルに裏付けられた大学での人材育成を図る計画1-4を立案した。 1. 体系的なカリキュラムの構築として、基礎科目から助産の専門科目、論文作成に至るまでを段階的に学べるように、カリキュラムを構築している。 2. 首都圏の内部進学者が増加し、学部から助産学専攻科への一貫教育が図られつつある。 3. 4. 産学連携・地域連携による共同研究の推進を図ることで、計画国際会議発表の推進に導けるよう取り組んでいる。</p>				
<p>【計画21-5】 ⑦ 研究レベル向上の為の教育プログラムの確立を図るとともに、学際的・国際的な視点から自分の専門性を認識できる人材育成のシステムを整備する。</p> <p>「計画達成のための方策」 研究レベルに裏付けられた大学院での人材育成を図る。 1. 体系的なカリキュラムの構築。 2. 学部・大学院の一貫教育の導入。 3. 国際会議発表の推進。 4. 産学連携・地域連携による共同研究の推進。</p> <p>「評価指標」 ・年1回以上の学会・研修会への参加 ・勉強会・抄読会の実施状況 ・実践的英語教育の導入状況 ・英語抄録作成クラス開催状況 ・学生の海外学習状況 ・論文の学会発表状況 ・海外論文発表経験者数の状況</p>	II	<p>研究レベル向上の為の大学教育プログラムを確立するために、研究レベルに裏付けられた大学での人材育成を図る計画1-4を立案した。 1. 体系的なカリキュラムの構築として、共通科目から個別の専門科目、そして修士・博士論文作成の研究に至るまでを段階的に学べるように、研究特論など基礎的科目も充実させた。 2)に関しては、進行はできなかった。 4の産学連携・地域連携による共同研究の推進を図ることで、計画3の国際会議発表の推進に導けるよう取り組んでいる。 取り組みの中で、研究レベル向上の為の大学教育プログラムの作成を図るために、研究のスケジュールリングを指導している状況である。</p>	<p>【年度計画21-5】</p> <p>「評価指標」</p>	—					

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画		令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分		評価区分		評価区分			
<p>【計画21-6】 助産学専攻科のアメニティ空間の改善を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。 1. 施設のアメニティ空間の改善。 2. グローバル化に対応する施設環境整備。 3. 良質な学修環境整備。</p> <p>「評価指標」 ・キャンパス空間の整備状況</p> <p>【計画21-7】 大学ブランドを学生が認めて受験したいと思える大学及び助産学専攻科をつくる。</p> <p>「計画達成のための方策」 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1. 卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。 2. 産学協同研究成果の対外的なPR促進。 3. 地域社会との連携によるPR促進。 4. 特別教授制度による先端研究導入。 5. 国際交流グローバル化推進。</p> <p>「評価指標」 ・一般入試志願倍率 5倍以上</p> <p>○和歌山助産学専攻科 【計画22-1】 「災害と助産」の必修科目を踏まえ、平時から備える能力を養うことで一歩先を見据えた教育を行う。</p> <p>「計画達成のための方策」 全国でリスクが高まっている大地震を中心とした災害における周産期医療について専門的に学ぶ「災害と助産」を必修科目に設定したところであり、周産期の母子や多様化するセキュアリティにも着目し、平時から備える能力を養う。</p> <p>「評価指標」 ・「災害と助産」履修によって、母子保健における災害時への関心が高まる授業アンケートの実施状況</p>	II	<p>1, 2. 講義教室が大学院と共有であるため、常時使用できるわけではなく、使用教室が日によって変わってしまい、学生の学習環境の確保が求められる。</p> <p>3. 学生の分娩介助演習のために、分娩介助モデルを新規購入したが、学生数に対し不十分であるので、充足させていく。</p>	II	<p>【年度計画21-6】 キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。 1. 施設のアメニティ空間の改善。 2. グローバル化に対応する施設環境整備。 3. 良質な学修環境整備。</p> <p>「評価指標」 ・キャンパス空間の整備状況</p> <p>【年度計画21-7】 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1. 卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。 2. 産学協同研究成果の対外的なPR促進。 3. 地域社会との連携によるPR促進。 4. 特別教授制度による先端研究導入。 5. 国際交流グローバル化推進。</p> <p>「評価指標」 ・一般入試志願倍率 5倍以上</p>	II	<p>1-3. 講義教室が大学院と共有であるが、日程調整し、学生の学習環境の確保に努めている。第3別館の教室や階段に関して、学生より整備を求めるオピニオンが出ており、対応が必要である。</p>		
	III	<p>1-3. 産後ケア研究センターでの取り組みや、助産雑誌や育児雑誌、インターネットへの寄稿、ホームページでの紹介などのPR促進効果により、オンラインでの助産学専攻科のオープンキャンパスでは、参加者100名程度と大変盛況であり、本学に進学したいと思ったなどの感想が多かった。一般入試の受験者は70名程度であり、志願者倍率は、5倍以上となった。</p> <p>5. 【年度計画21-2】を参照。授業の一環で、海外で活躍する医療職の話や働く機会を設け、将来のキャリア選択の一助としている。</p>	III	<p>1-3. 産後ケア研究センターでの取り組みや、助産雑誌や育児雑誌、インターネットへの寄稿、ホームページでの紹介などのPR促進効果により、オンラインでの助産学専攻科のオープンキャンパスでは、参加者100名程度と大変盛況であり、本学に進学したいと思ったなどの感想が多かった。内部進学希望者も増加している。</p> <p>4. 5. 授業の一環で、海外で活躍する医療職の話や働く機会を設け、将来のキャリア選択の一助としている。</p>	III	<p>1-3. 産後ケア研究センターでの取り組みや、助産雑誌や育児雑誌、インターネットへの寄稿、ホームページでの紹介などのPR促進効果により、オンラインでの助産学専攻科のオープンキャンパスでは、参加者100名程度と大変盛況であり、本学に進学したいと思ったなどの感想が多かった。内部進学希望者も増加している。</p> <p>4. 5. 授業の一環で、海外で活躍する医療職の話や働く機会を設け、将来のキャリア選択の一助としている。</p>		
	IV	<p>・地震をはじめとした災害時の助産や母子保健について、備えから発生直後、中長期にわたる避難所生活に至るまで、専門家を招聘してオムニバス方式で多面的に授業を行った。</p> <p>・アンケートによると「基本的な専門知識が得られた」「新しい考え方や発想が得られた」「総合的に満足できた」の問いに全員が「思う」と回答した。和歌山県の実情に沿った現実的な授業を展開できた。</p>	IV	<p>【年度計画22-1】 「災害と助産」履修によって、母子保健における災害時への関心が高まる授業アンケートの実施。</p> <p>「評価指標」 ・「災害と助産」履修によって、母子保健における災害時への関心が高まる授業アンケートの実施状況</p>	IV	<p>・災害時の助産や母子保健について、備えから発生直後、中長期にわたる避難所生活に至るまで、専門家を招聘してオムニバス方式で授業を行った。</p> <p>・アンケートによると「基本的な専門知識が得られた」「新しい考え方や発想が得られた」「総合的に満足できた」の問いに全員が「思う」と回答した。和歌山県の実情に沿った現実的な授業を展開できた。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画22-2】 必修科目の「カウンセリング論」を踏まえ、喪失体験者への接し方について演習を通して学び、寛容、愛、心温かい医療人としての態度を修得する。</p> <p>「計画達成のための方策」 必修科目に「カウンセリング論」を編成し、非常勤講師に公認心理師兼臨床心理士兼大学病院でのカウンセラーの授業を通して、ペリネイタルロスなど喪失体験者への接し方について演習を通して学び、寛容、愛、心温かい医療人としての態度を修得する。</p> <p>「評価指標」 ・「カウンセリング論」履修によって、心温かい医療人としての接し方について理解する授業アンケート実施</p> <p>【計画22-3】 一歩先を見据えながら助産を創造し、地域周産期医療向上に寄与できる助産師の育成を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 和歌山看護学部から進学を希望する者及び地域周産期医療への貢献を希望する受験生を、西日本を中心に広くリクルートし、優秀な人材を確保する。また、修了後は助産師国家試験に合格し、希望する就職ができるよう支援する。</p> <p>「評価指標」 ・定員充足率の状況 ・助産師国家試験合格率、就職率の状況</p> <p>【計画22-4】 国際的視野と研究力を備え、国際母子保健分野で将来リーダーとなる資質を養成する。</p> <p>「計画達成のための方策」 グローバル化の問題を解決するための「国際母子保健活動論」及びリアルタイムで世界の母子保健情勢を英語で学ぶ「英語文献講読（必修科目）」の履修、加えて大規模な専門分野の学会参加も含めて、国際的視野と研究力を備え、国際母子保健分野で将来リーダーとなる資質を養成する。</p> <p>「評価指標」 ・ガイダンスで「国際母子保健活動論」の履修または聴講状況 ・学会への参加状況</p>	IV	<p>・臨床カウンセラーである講師の演習を行った。 ・アンケートでは、「基本的な専門知識が得られた」「新しい考え方や発想が得られた」「発展的な学びにつながる」「総合的に満足できた」の問いについて全員が「思う」と回答した。このような実践的な演習は初めてで、実習前に有意義だったという声が多かった。</p>	<p>【年度計画22-2】 「カウンセリング論」履修によって、心温かい医療人としての接し方について理解する、授業アンケートを実施する。</p> <p>「評価指標」 ・「カウンセリング論」履修によって、心温かい医療人としての接し方について理解する授業アンケート実施</p> <p>【年度計画22-3】 和歌山県立高等看護学院助産学科が閉科したため、以降の定員充足率を100%とする。助産師国家試験合格率100%、就職率100%とする。</p> <p>「評価指標」 ・定員充足率の状況 ・助産師国家試験合格率、就職率の状況</p> <p>【年度計画22-4】 ガイダンスで「国際母子保健活動論」の選択の必要性を説明し、学生全員が履修または聴講する。学会に1回参加する。</p> <p>「評価指標」 ・同左</p>	IV	<p>・昨年同様、大学病院で周産期のペリネイタルロスなどを支援している専門のカウンセラー（公認心理師）を非常勤講師に招いて、臨床の実践的な演習も踏まえた授業科目を開講できた。アンケートを閲覧できなかったが、学生の声を聴くと授業は好評で、有意義な時間だったと述べていた。</p> <p>・令和5年度までは実習施設の確保の問題から定員は8名としたが、入学辞退者が1名出て7名の入学者で開講した。入学者7名全員が単位を取得し、修了することができた。 ・令和6年度からは定員10名の入学者を予定していたが、学部内受験者数が3名、学外受験者数も7名とどちらも昨年よりも少なく、合格辞退者1名が出た結果9名の入学予定者で開講することとなった。学部内進学希望は多かったものの最終的に受験につながらず、奨学金返済の課題が再度浮上した。また学外からの受験者も減少し、リクルート方法も検討していく必要がある。 ・就職率は令和5年度も100%で、助産師国家試験は全員が受験した。</p> <p>・ガイダンスで昨年同様に意義を説明し、全員が選択した。授業アンケートを閲覧できなかったが、担当教員からは学生が熱心に受講していたと聞くことができた。 ・令和5年度も日本母性衛生学会学術集会上で学生全員が参加し、国際母子保健について視野を広め、リーダーの資質の基盤ができたと考える。</p>		

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>○感染制御学教育研究センター 【計画23-1】㊦ 「感染制御実践看護学講座」を継続するとともに、COVID-19パンデミックを経験し、感染制御に関わる人材育成について、本学がどのように貢献できるのか、引き続き検討していく。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 「感染制御実践看護学講座」の継続。 2. COVID-19パンデミックを経験し、感染制御に関わる人材育成についての検討。</p> <p>「評価指標」 ・ 合格者数20名～25名を維持</p> <p>【計画23-2】㊦ JHAI誌発刊を継続するとともに、高齢者施設医療従事者に対する感染制御の知識普及のためのセンターで可能な「研修」の在り方など情報収集を行う。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. JHAI誌発刊の継続。 2. 高齢者施設医療従事者に対する感染制御の知識普及は喫緊の課題となっていることから、センターで可能な「研修」の在り方などの情報収集。 「評価指標」 ・ JHAI誌発刊年2回の発行維持 ・ 高齢者施設従事者への研修体制の構築状況</p> <p>○産後ケア研究センター 【計画24-1】㊦ 産後ケア研究センターでの実習を通じ、地域の母子を支援する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. アーリー・エクスポージャーの環境として、産後ケア研究センターなど、現場で働く助産師活動に触れる。 2. 地域や海外で助産師活動に従事する講師の招致。 3. 地域に貢献できるように、妊産婦・乳幼児健診の実習の機会を増やす。 4. 生活の場における地域での母子支援の在り方について検討する。 「評価指標」 ・ 実習の受け入れ状況</p>	III	<p>1. 23名の合格者のうち、個人的理由で1名離脱し22名が修了し「感染制御実践看護師」を付与した。 2. 予定通り「修了試験」を実施した。客観評価は、研修生自身のウイークポイントを明確にできること、さらに「資格認定」のレベルの維持にも重要である。 3. 現在検討中。 4. 平成5年の研修生の応募数は定員の2倍に及び、関心の高さをうかがえた。本研修会は診療報酬上の施設基準「適切な研修」と認められており、わが国の医療施設の感染対策を担う人材育成機関として大きく貢献しており、今後も本体制を維持しつつ継続していく。</p>	<p>【年度計画23-1】 1. 合格者数を20名～25名程度を維持する。 2. 「感染制御実践看護師」資格付与のために従来からの考査に加え「修了試験」を新設し、研修生と講座全体の評価を実施する。 3. 修了生の動向調査を行う。以後、定期的に実施し、結果を公開していく方向で検討する。 4. 今後の感染制御に関わる人材育成について「特定看護師」育成プログラムを含め情報収集していく。 「評価指標」 ・ 合格者数20名～25名を維持</p>	III	<p>1. 24名の入学者全員が修了し「感染制御実践看護師」を授与した。 2. 「修了試験」に合格することが卒業認定の重要ポイントとして位置付けているが、それ以外に前期修了時点で実施する「科目試験」、自施設実習修了時点での「成果発表」、そして外部委員により審査を経て総合的に評価している。 3. アンケートは終了し、集計中。 4. 平成5年の研修生の応募数は定員の2倍に及び、関心の高さをうかがえた。本研修会は診療報酬上の施設基準「適切な研修」と認められており、わが国の医療施設の感染対策を担う人材育成機関として大きく貢献しており、今後も本体制を維持しつつ継続していく。</p>				
	IV	<p>1. 予定通り年2刊発刊。 2. 「高齢者施設従事者」対象の感染制御に関する研修については、現状のセンターの運営体制では企画自体難しく、当面高齢者施設従事者をサポートする「感染制御実践看護師」の育成に注力していく。</p>	<p>【年度計画23-2】 1. 年2回の発刊を維持していく。 2. センターで可能な高齢者施設従事者への研修体制を構築する。又は高齢者施設の感染制御の底上げのためにセンターで貢献できることを検討する。 「評価指標」 ・ JHAI誌発刊年2回の発行維持 ・ 高齢者施設従事者への研修体制の構築状況</p>	IV	<p>1. 予定通り年2刊発刊。 2. 計画「2」に関しては昨年同様、「高齢者施設従事者」対象の感染制御に関する研修は、現状のセンターの運営体制では企画自体難しく、高齢者施設従事者をサポートする「感染制御実践看護師」の育成に注力していく。</p>				
	IV	<p>・ オンラインでの集団教育を計3回実施し、延べ20名の母親が参加した。 ・ 助産師学生21名を、地域母子保健学の演習や助産学実習Ⅴの実習内で、地区踏査や家庭訪問の実際、助産管理実習を実施した。電話相談や訪問型ケアの実際を学ぶことができた学生より評価を受けた。 ・ 母性看護学実習で12名、統合実習で10名、実習の受け入れをした。</p>	<p>【年度計画24-1】 COVID-19禍でオンライン育児クラス開始。</p> <p>「評価指標」 ・ 実習の受け入れ状況</p>	IV	<p>・ 地域の母子を対象とした集団教育を計3回実施し、合計21組の母子が参加した。 ・ 助産師学生20名が、地域母子保健学の演習や助産学実習Ⅴの実習内で、地区踏査や家庭訪問の実際、助産管理実習を実施した。 ・ 母性看護学実習で8名、統合実習で10名、実習の受け入れを行った。</p>				

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議																			
	評価区分			評価区分	評価区分																					
<p>【計画24-2】 ⑦ 大学と品川区との連携を図り、大学院までのキャリアを見据えた教育を行う。</p> <p>「計画達成のための方策」 1.産後ケア研究センターの従事者研修会への参加。 2.東京母性衛生学会学術セミナーの参加。 3.チーム医療推進助産師研修会への参加。</p> <p>「評価指標」 ・研修会の参加者数、参加回数</p> <p>【計画24-3】 ⑦ 産後ケア研究センターのアメニティ空間の改善を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。 1.施設の長寿命化及び更新（アメニティ空間の改善）。 2.グローバル化に対応する施設環境整備。 3.良質な学修環境整備。</p> <p>「評価指標」 ・キャンパス空間の整備状況</p> <p>【計画24-4】 ⑦ 産学協同体制の構築によるブランド力向上プロジェクトの推進を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1.卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。 2.産学協同研究成果の対外的なPR促進。 3.地域社会との連携によるPR促進。 4.特別教授制度による先端研究導入。 5.国際交流グローバル化推進。</p> <p>「評価指標」 ・ブランド力向上プロジェクトの推進状況</p>	III	<p>1.産後ケア研究センターの従事者研修会は年度当初、3日間に渡り実施し、年度途中にブラッシュアップ研修も実施しており、参加者数は約20名であった。 2.東京母性衛生学会学術セミナーは約50名が参加した。 3.チーム医療推進助産師研修会は、今年度はコロナ禍により中止した。</p>	IV	<p>【年度計画24-2】 1.産後ケア研究センターの従事者研修会への参加。 2.東京母性衛生学会学術セミナーの参加。 3.チーム医療推進助産師研修会への参加。</p> <p>「評価指標」 ・研修会の参加者数、参加回数</p> <p>【年度計画24-3】 キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。 1.施設の長寿命化及び更新（アメニティ空間の改善）。 2.グローバル化に対応する施設環境整備。 3.良質な学修環境整備。</p> <p>「評価指標」 ・キャンパス空間の整備状況</p> <p>【年度計画24-4】 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1.卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。 2.産学協同研究成果の対外的なPR促進。 3.地域社会との連携によるPR促進。 4.特別教授制度による先端研究導入。 5.国際交流グローバル化推進。</p> <p>「評価指標」 ・ブランド力向上プロジェクトの推進状況</p>	IV	<p>1.産後ケア研究センターの従事者研修会は年度当初、3日間に渡り実施し、年度途中にブラッシュアップ研修も実施しており、参加者数は約15名であった。 3.チーム医療推進助産師研修会は、4名が参加した。</p> <p>1-3.事務職員や従事者が働きやすい環境となるよう、配置転換を行った。看護学科学生や助産学専攻科生の実習受け入れに関して、保健センター内の産後ケア室の開設により、学生が学修しやすい環境整備を図った。</p> <p>1-3.産後ケア研究センターでの取り組み内容について、助産雑誌や育児雑誌、インターネットへの寄稿、ホームページでの紹介などのPR促進効果により、利用者数が維持されている。卒業生も従事者として勤務し、交流が図られている。 4.5.外国籍の利用者は今年度は5名おり、外国語の間診票を使用するなどして対応し、保健センターからも外国籍の対象者の紹介があり、区との協力体制も調整できてきている。</p>																				
	II	<p>1-3.事務職員や従事者が働きやすい環境となるよう、配置転換を行った。また看護学科学生や助産学専攻科生の実習受け入れに関して、学生が学修しやすい環境整備を図っているが、産後ケア研究センター内のみでは狭小のため、他教室を利用して実施している。</p>	IV	<p>1-3.事務職員や従事者が働きやすい環境となるよう、配置転換を行った。看護学科学生や助産学専攻科生の実習受け入れに関して、保健センター内の産後ケア室の開設により、学生が学修しやすい環境整備を図った。</p>																						
	IV	<p>1-3.産後ケア研究センターでの取り組み内容について、助産雑誌や育児雑誌、インターネットへの寄稿、ホームページでの紹介などのPR促進効果により、利用者数が維持されている。地域社会との連携により、日帰り型産後ケアについて、新たな形態として保健センター内で実施できるよう、場所や物品、人員の検討準備を行った。 5.外国籍の利用者は前年度3名であったが、今年度は10名と増加しているが、外国語の対応が可能なスタッフが従事していることにより、さらに保健センターからも外国籍の対象者の紹介があり、区との協力体制も調整できてきている。 ・産後ケアの利用者数は以下のように推移している。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>令和元年度</th> <th>令和2年度</th> <th>令和3年度</th> <th>令和4年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>日 帰</td> <td>325</td> <td>162</td> <td>228</td> <td>223</td> </tr> <tr> <td>訪 問</td> <td>344</td> <td>127</td> <td>194</td> <td>202</td> </tr> <tr> <td>電話相談</td> <td>639</td> <td>925</td> <td>367</td> <td>348</td> </tr> </tbody> </table> <p>※令和4年度は、1月までの数値となっている。</p>		令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	日 帰	325	162	228	223	訪 問	344	127	194	202	電話相談	639	925	367	348	IV	<p>1-3.産後ケア研究センターでの取り組み内容について、助産雑誌や育児雑誌、インターネットへの寄稿、ホームページでの紹介などのPR促進効果により、利用者数が維持されている。卒業生も従事者として勤務し、交流が図られている。 4.5.外国籍の利用者は今年度は5名おり、外国語の間診票を使用するなどして対応し、保健センターからも外国籍の対象者の紹介があり、区との協力体制も調整できてきている。</p>		
	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度																						
日 帰	325	162	228	223																						
訪 問	344	127	194	202																						
電話相談	639	925	367	348																						

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>○学長戦略本部等</p> <p>【計画25-1】㊦(総合研究所) 健康情報基盤研究ユニット(TIS)、ヘルスシステムデザイン研究ユニット(ビーンズ)、教育DX研究ユニット(文科省補助)の三本柱となる研究ユニットを立ち上げる。</p> <p>「計画達成のための方策」 すべての学部・学科の教員が関与する形で、3つの各研究ユニットによる研究成果(論文・書籍・知的財産等)が生まれ、その成果を授業に還元する。</p> <p>「評価指標」 ・3つの各研究ユニットの設置状況、研究成果の状況</p> <p>【計画25-2】㊦(総合研究所) ヘルスシステムデザイン研究ユニットの主管により、学生を巻き込んだ研究共創行事として「ジャックと豆の木ワークショップ」を推進する。</p> <p>「計画達成のための方策」 学生有志と教職員の研究共創行事である「ジャックと豆の木ワークショップ」で生まれたアイデアに基づく研究から研究成果(論文・書籍・知的財産等)が生まれ、その成果を授業に還元する。</p> <p>「評価指標」 ・「ジャックと豆の木ワークショップ」の開催状況、研究成果の状況</p>	III	<p>・3つの研究ユニットを立ち上げ、学内外に向けての各ユニットの活動を模索した。令和4年度は、健康情報基盤研究ユニット、教育DX研究ユニット、ヘルスシステムデザイン研究ユニットそれぞれのユニットで具体的な活動を実施した。</p>	<p>【年度計画25-1】 3つの研究ユニットで、研究計画に基づき研究活動を行う。</p> <p>「評価指標」 ・3つの各研究ユニットの設置状況、研究成果の状況</p>	III	<p>・新たに提携を行った京急サービス社との連携を深め、同社主催へ各種イベントへの本学の参加や連携しての新規事業への参画を図るなどにより、研究ユニットの活動推進を図った。</p> <p>・ヘルスシステムデザイン研究ユニットでは、台湾の提携先がカナダで展開しているホームケア支援システムを日本にローカライズするための研究に着手した。</p>		
	IV	<p>・ビーンズとの連携のもと「医療と生活を繋ぐヘルスデータ基盤のこれから」と題したヘルスケアDXシンポジウムを、台湾から医療界のゲスト講師を招き、令和5年2月17日に実施した。対面・オンラインをあわせ52名の参加申込があった。</p> <p>・学内学部生や若手教員を対象に、12月に懸賞論文「アジアとともに歩む一歩先の医療保健」を実施。応募論文の中から、学生の部で2組3名が最優秀賞、若手教員の部で、1名が最優秀賞、2名が優秀賞を受賞した。最優秀賞、優秀賞の受賞者は、受賞賞品として3月20日から23日の日程で台湾の医療施設を巡る研修に参加した。</p>	<p>【年度計画25-2】 「ジャックと豆の木ワークショップ」を継続し、そこで生まれたアイデアを還元し、研究プロジェクトなどの立ち上げを検討する。また、成果の一部を授業に還元する方法を検討する。</p> <p>「評価指標」 ・「ジャックと豆の木ワークショップ」の開催状況、研究成果の状況</p>	IV	<p>・京急サービス社が主催する横須賀市のイベントに、ゴールデンウィークとスポーツの日の2回参加した。医療栄養学科、医療情報学科の教員が中心となり、学科学生も参加して「子ども向け野菜クイズ」「よこすか野菜を使った試食提供」「骨密度測定」「頸動脈エコー体験」など種々の『健康チェック』のイベントを企画して、参加者に提供した。</p> <p>・京急サービス社、本学を含む三者による共同事業体を結成し、京急沿線の自治体が募集した体育施設の指定管理の競争入札に参加した。本学としては同施設を利用しての公開講座や健康イベントの開催、及び五反田キャンパスの地元である品川区との連携・深耕を意図して、全学体制でチャレンジしたが、残念ながら落札には至らなかった。</p>		

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議	
	評価区分			評価区分				
<p>【計画25-3】 ㊦(総合研究所) 教育DX研究ユニットの主管により、高校教員、大学教員がともに教育DXを学ぶ場としてオンラインシンポジウムを開催する。</p> <p>「計画達成のための方策」 DX演習科目における授業満足度及びICEモデルによる自己評価が、DX以前よりも20%以上向上する。</p> <p>「評価指標」 ・DX演習科目における授業満足度及びICEモデルによる自己評価の状況</p> <p>【計画25-4】 ㊦(総合研究所) 健康情報基盤研究ユニットの主管により、萌芽的研究に対する学内助成活動を推進する。</p> <p>「計画達成のための方策」 学内助成活動による研究成果や社会活動から、研究成果（論文・書籍・知的財産等）が生まれ、その成果を授業に還元する。</p> <p>「評価指標」 ・学内助成活動による研究成果や社会活動からの研究成果の状況</p> <p>【計画25-5】 ㊦(IR推進室) IR推進室として、中期目標・計画やアクションプランに基づく諸活動について点検評価を行う際、定量データに基づく評価・分析、情報の共有を行い、引き続き「全学的な見える化」を推進する。</p> <p>「計画達成のための方策」 1. 授業や学生生活など教学の根幹に関わる事項について横断的な情報収集・分析を行うことにより、「全学的な見える化」を推進する。</p> <p>「評価指標」 ・学生の学修に関する実態調査アンケートの回答率（継続）90% ・授業評価アンケートの回答率（継続）90% ・分析結果に対する感想や意見の件数 年10件</p>	IV	<p>・教育DXユニットのイベントとして、令和4年12月10日に高校教員や大学教員を主たる対象として、「持続可能な社会を支える大学教育のこれから」と題したシンポジウムを、対面・オンラインのハイブリッド形式で実施し、計25名参加申込みがあった。「アクティブ・ラーニングと指導者コンピテンシー」の特別講演、「Society5.0における大学の役割」のパネルディスカッションを行った。</p> <p>・令和5年3月13日に、教育支援コンテンツの開発支援を念頭に、教員経験が3年未満の教員や大学院生を対象とした「授業設計ワークショップ」を対面・オンラインのハイブリッド型で実施、25名が参加した。</p>	III	<p>【年度計画25-3】 ICEモデル適用科目の授業満足度と自己評価が向上していることを確認し、評価する。</p> <p>「評価指標」 ・DX演習科目における授業満足度及びICEモデルによる自己評価の状況</p> <p>【年度計画25-4】 助成対象活動の成果を、さらに発展させるためのフォローアップを行う。また、成果の一部を授業に還元する方法を検討する。</p> <p>「評価指標」 ・学内助成活動による研究成果や社会活動からの研究成果の状況</p> <p>【年度計画25-5】 1. 授業や学生生活など教学の根幹に関わる事項について横断的な情報収集・分析を行うことにより、「全学的な見える化」を推進する。</p> <p>「評価指標」 ・学生の学修に関する実態調査アンケートの回答率（継続）90% ・授業評価アンケートの回答率（継続）90% ・分析結果に対する感想や意見の件数 年10件</p>	III	<p>・前年度の授業設計を受けて、複数の学部の全体および一部の科目において、ICEモデルの本格運用を行った。授業満足度については、引き続き評価について分析を行っている。</p> <p>・株式会社ケアコムとの連携により、同社のケア環境研究所（群馬県）でのコメの栽培を通じて、デジタル教材を活用した食育の展開を、医療栄養学科及び青葉学園野沢こども園とともに図り、左記分野の中で「産業DXユニット」での活動を推進した。</p>		
	II	<p>・TIS株式会社との連携での資金導入により、学内での研究活動の助成を実施。前年度2月～3月に実施した学内募集に7件の応募があり、4月に厳正な審査を行い、最優秀賞1名（40万円）、優秀賞2名（5万円）を選定した。</p>	II	<p>・ユニットにおいて昨年度の助成対象者や外部資金の獲得テーマについてレビューを行い、事業化可能性について検討をした。</p> <p>・合わせて、オンラインセミナーの次年度実施について計画した。</p>				
	III	<p>1. 学生の学修に関する実態調査アンケート、授業評価アンケートには重要な定点調査であるところ、令和4年度は、分析結果を学生に還元する「IRNews学生版」の刊行ができなかったため、このデータに対する意見収集を行っていない。令和5年5月までに「学生版」を公表予定なので、早めに意見収集を行うようにしたい。</p> <p>「評価指標」 ・学生の学修に関する実態調査アンケートの回答率（継続）59.2% ・授業評価アンケートの回答率（継続）62.7%</p>	II	<p>1. 学生の学修に関する実態調査アンケートの回答率は69.9%、授業評価アンケートの回答率は70.3%と、いずれも目標を下回った。回収率向上のための取り組みを次年度検討したい。</p> <p>・2023年度は、分析結果について他大学IR推進室と意見交換会を行うことを優先したため、「感想や意見の件数」は算定不能である。意見公開会の結果、LMS利用時間という指標を有効活用することをはじめ、その結果を学内公開し始めたので、2024年度はその公表を行っていききたい。</p>				

第3期中期計画	評価区分	令和4年度実績	令和5年度計画	評価区分	令和5年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
<p>2. 高等教育に求められる役割が変化している情勢を十分に踏まえ、学修成果の可視化を図る基盤を整備する。</p> <p>「評価指標」 ・アセスメント・プランに基づく学修成果の定量的評価指標（ディプロマ・サプリメント）分析結果の報告件数（新規）年2回 ・学修成果を可視化するためのデータ基盤整備<キャンパス・プラン整備>（継続） ・高等教育関係団体や他大学からの情報収集（継続） ・他大学研修会や高等教育に関する学会・研究会における活動報告件数 年2回</p>	III	<p>2. ディプロマ・ポリシーの運用状況等について、IR推進室運営会議等の関係会議で報告した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学修成果の可視化の一環としてキャンパスプランの改修に取り組み、とくに出席状況を学生及び保証人が把握しやすくする機能を実装した。令和5年度から段階的に運用予定である。 九州大学で開催されたIR担当者会議に室員2名が出席し、情報交換を行った。その後、近隣大学と連携し、IR推進室同士の情報交換会を実施した。 <p>「評価指標」 ・アセスメント・プランに基づく学修成果の定量的評価指標（ディプロマ・サプリメント）分析結果の報告件数（新規）年1回 ・他大学研修会や高等教育に関する学会・研究会における活動報告件数 年1回</p>	<p>2. 高等教育に求められる役割が変化している情勢を十分に踏まえ、学修成果の可視化を図る基盤を整備する。</p> <p>「評価指標」 ・アセスメント・プランに基づく学修成果の定量的評価指標（ディプロマ・サプリメント）分析結果の報告件数（新規）年2回 ・学修成果を可視化するためのデータ基盤整備<キャンパス・プラン整備>（継続） ・高等教育関係団体や他大学からの情報収集（継続） ・他大学研修会や高等教育に関する学会・研究会における活動報告件数 年2回</p>	III	<p>2. ・他大学IR推進室との交流は活性化し、2つの医療系大学と意見交換を行うことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ディプロマサプリメントの分析結果は、IR年報を通じて学内にフィードバックできた。 				
<p>3. 活力あふれる大学づくりを推進するため、情報分析の結果を積極的に還元する。</p> <p>「評価指標」 ・広報媒体の発行件数（IR News・IR年報の刊行）年2回 ・学生向け広報媒体の発行件数 年2回 ・研究業績に関する分析の検討（新規）</p>	II	<p>3. 令和4年度は、COVID-19対策本部が学校する「遠隔授業だより」に掲載するためのLMSの利用状況データの提供等を行ったが、その反面、IR推進室としての媒体発行には至らなかった。令和5年度は独自媒体での広報活動を進めていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和4年度は医学中央雑誌ベースで185件の研究業績があったが、令和3年度は209件、令和2年度は202件であり、1割程度の減少がみられている。また、原著に限れば令和4年度は19件と、令和3年度の41件、令和2年度の38件と比べても大幅な減少といえる。この状況が続くことは望ましくないため、まずは現状を共有した上で投稿を促すとともに、引き続きモニタリングにつとめていきたいと考えている。 <p>「評価指標」 ・広報媒体の発行件数（IR News・IR年報の刊行）年0回 ・学生向け広報媒体の発行件数 年0回</p>	<p>3. 活力あふれる大学づくりを推進するため、情報分析の結果を積極的に還元する。</p> <p>「評価指標」 ・広報媒体の発行件数（IR News・IR年報の刊行）年2回 ・学生向け広報媒体の発行件数 年2回 ・研究業績に関する分析の検討（新規）</p>	II	<p>3. ・広報媒体については、2022年度まではCOVID-19対策本部が発行する「遠隔授業だより」にIRデータを提供する形をとることが多かったが、2023年度の途中で同本部が解散となったため、どの媒体を用いるのが効果的かはまだ検討段階である。</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究業績については、2023年度中に研究力強化会議が設置されたことから、同会議とも連携して研究パフォーマンス指標の策定を検討していく。 				

第3期中期計画	令和4年度実績		令和5年度計画	令和5年度計画達成状況		自己点検・評価委員会	内部質保証推進会議
	評価区分			評価区分			
<p>【計画26】 【計画2の再掲】 (学長戦略本部・企画部) 教育の質保証の観点から、毎年度定期的に自己点検・評価及び検証を行い、その結果について外部評価を実施し公表する。また、学長直轄の学長戦略本部を中心に、より適切なものとなるよう外部評価結果等を踏まえ、教育課程及び教育方法等の改善・充実を図る。</p> <p>「計画達成のための方策」 学長直轄の学長戦略本部を中心に、全学的な教学マネジメントシステムを構築するとともに、「教学マネジメントチェックリスト(仮称)」を運用し、「大学全体レベル」、「学位プログラムレベル」、「授業科目レベル」毎に自己点検・評価及び検証等を行いながら、内部質保証システムのPDCAサイクルを構築する。</p> <p>「評価指標」 ・「教学マネジメントチェックリスト(仮称)」の作成及び活用した自己点検・評価及び検証等の実施状況</p>	IV	<p>・学長直轄の「学長戦略本部」に、「学長戦略本部教学マネジメント・推進DXプロジェクト要綱」に基づく同プロジェクトチームを5月に設置し、政府の「教学マネジメント指針」等を踏まえ、「学修者本位の教育の実現」のため、「教学マネジメント」が適切に機能しているかを各階層ごとに、恒常的・総合的に点検・評価を実施し、適切に教育改善が図られるよう、「教学マネジメントチェックリスト」及び「アセスメントプラン」を検討・準備した結果、令和5年1月11日開催の内部質保証推進会議にて正式に策定した。</p> <p>・同年2月27日には、各部局代表者等に対する説明会を開催し、趣旨や内容等の説明を行ったほか、同説明会資料等は学内デスクネット内に収納し、いつでも資料や動画、Q&Aを確認できるよう情報共有に努めるとともに、本年度内の試行的な運用についても依頼したところであり、全て年度計画通り実施した。</p>	IV	<p>【年度計画26】 学長直轄の学長戦略本部を中心に、全学的な教学マネジメントシステムを構築するとともに、「教学マネジメントチェックリスト(仮称)」を完成させ、「大学全体レベル」、「学位プログラムレベル」、「授業科目レベル」毎に活用し、自己点検・評価及び検証を開始する。</p> <p>「評価指標」 ・「教学マネジメントチェックリスト(仮称)」の作成及び活用した自己点検・評価及び検証等の実施状況</p>	IV	<p>・入学者受入れの方針に基づく大学入学者選抜の実施に関する「教学マネジメント指針(追補)(令和5年2月24日)」が文部科学省から発出されたことを踏まえ、学長戦略本部の担当プロジェクトチームにおいて、「教学マネジメントチェックリスト【Ver. 2】」の改正案を策定し、令和5年7月12日開催の内部質保証推進会議において審議・承認されたので、改正版を7月13日付で学内関係者に周知した。</p> <p>・また、「アセスメントプラン」についても、日本私立学校振興・共済事業団からの指導等も踏まえ、評価指標を追加する等のため担当プロジェクトチームにおいて改正案を策定し、令和5年10月18日開催の内部質保証推進会議において審議・承認されたので、改正版を10月23日付で学内関係者に周知した。</p> <p>・令和5年度から「教学マネジメントチェックリスト」に基づく点検・評価を本格実施することから、教員のFD・SD活動及び事務職員のSD活動の一環として、全教職員が参加する「東京医療保健大学を語る会」を令和5年10月25日に開催し、「教学マネジメントチェックリストに基づく点検・評価の実施に向けて～具体的な取組の視点について～」をテーマとし、医療保健学部看護学科 西村礼子准教授及び東が丘看護学部看護学科竹内朋子教授より発表をいただき、「教学マネジメントチェックリスト」の取組について活発な意見交換を行い、教職員の理解を深めることができた。</p> <p>・「令和5年度計画の達成状況に基づく自己点検・評価報告書作成要領」及び「令和5年度教学マネジメントチェックリスト作成要領」について、担当プロジェクトチームにおいて要領案を策定し、令和5年12月6日開催の内部質保証推進会議において審議・承認されたため、同要領及び報告書様式等を12月19日付で学内関係者に周知した。</p> <p>・「令和5年度計画の達成状況に基づく自己点検・評価」については、部局内で3月末までに実施し報告書を作成し、また「令和5年度教学マネジメントチェックリストに基づく自己点検・評価」については、部局内で「学位プログラムレベル」、「授業科目レベル」ごとに令和6年5月末までに実施し、「学位プログラムレベル」について報告書を作成した上で、それぞれ企画部宛提出することとした。</p> <p>・これらの取組は、全て計画通り実施することができた。</p>	